

論 文

「セーヌ川を飲み干す」— (2)

— 中世フランスの人名と心思 —

宮 松 浩 憲

目 次

はじめに

序章 あだ名と心思

第1章 古代ギリシア・ローマ

第1節 ギリシア

第2節 ローマ

第2章 フランス

第1節 現代の人名

第2節 中世の人名 (以上, 『産業経済研究』46の2, 2005年, p.125-161)

1 地名—郷土意識の形成— (『産業経済研究』32の1, 1991, p.30-41)

2 職業

3 身体

4 社交 (付き合い)

5 動物

6 富裕

7 戦闘

[付録] 鉄とその象徴性—歴史人名学からの問いかけ— (『産業経済研究』45の1, 2004年, 205-220頁)

8 色彩

9 嗜好

10 性格・性癖

11 年齢

12 物による表現

13 その他

第3章 学者とあだ名 (本誌 48の1, 2007年, p.47-58)

第4章 国王とあだ名 (同上, p.59-93)

第5章 人名と流行

第1節 ゲルマン民族の大移動

第2節 十字軍

第6章 地域的特性—ブルトン人の場合—

おわりに

第3章 学者とあだ名

この場合、その人の個人的な才能によるものであったため、あだ名が継承され、人名として継承される可能性は残されていなかった。しかし、この時代の心思を知る上では欠かせない要素のひとつであるので、ここで簡単に取り上げることにする。

中世人にとって雄弁さの手本とされたのがキケロとヴェルギリウスである。例えば、「おお、もし誰かがヴェルギリウスやキケロのような雄弁さに匹敵するほど才能豊かで、かくも偉大な人物について記述することに苦心するならば」¹⁾とある如く。なかでもキケロの評判が突出していて、「ラテン語における雄弁さの王様 rex eloquentiae Latinae」²⁾と奉られるほどであった。事実、アウグスティヌスは彼を「ローマ語 (=ラテン語) の最高の作家」³⁾と呼んでいる。ここで、キケロの正式の名前を思い出してみよう。それは、上述した如く、Marcus Tullius Cicero で、我々は彼を家系名で呼んでいることになる。しかし、中世人の間で彼は氏族名の Tullius として知られていて、「キケロ流の雄弁さ Tulliana eloquentia」⁴⁾、「キケロ流の流暢さ Tulliana facundia」⁵⁾と言うとき、Ciceroではなくて Tullius のほうが使用されているのである。フランシス・ベーコンが確立したイギリス経験論哲学を継承して、18世紀に活躍したデイヴィッド・ヒュームもキケロを好んで Tullius (英語では Tully) と呼んでいたようである⁶⁾。また、ルイ敬虔王の息子たちの伝記を残しているニタールの父、アンジルベール (814

1) AASS, Apr. 2, p.674.

2) PL, 120, col. 1518.

3) Augustinus. *Pelag.* 2, 10, 37; *MGH, SS*, 15, p.809.

4) AASS, Sept, 6, p.521; *Analecta Bollandiana*, 1, p.362.

5) AASS, Aug. 2, p.676; Eginard, *Vie*, p.4.

6) *Essays, Literary, Moral, and Political by David Hume* London, 1870 p.47.

年没) は詩人として有名であったが、シャルルマーニュは手紙のなかで彼を「宮廷のホメロス」⁷⁾と呼んでいる。

雄弁さを強調する表現は他にもあった。その1つが「黄金の口」である。このあだ名の最初の保持者として知られているのが、ギリシア教父のなかで最高の雄弁家と言われているコンスタンティノーブル総大主教ヨハネス・クリソストモス (c.344-407年) で、このクリソストモスはギリシア語の $\chi\rho\nu\sigma\omicron$ (「黄金」の意) と $\sigma\tau\omicron\mu\omicron\varsigma$ (「口」の意) からなっている。ヨハネスは月並みな名前なので、他の同名者と区別するために、通常このあだ名と共に呼ばれている⁸⁾。その後、この美称辞は西ヨーロッパに導入されて、グレゴリウス大教皇がラテン語に訳された形 (「Os (口) aureum (黄金の)」) でそのように呼ばれることになる⁹⁾。アウグスティヌスも、遅くなってからであるが、教皇聖レオ9世 (1049-1054年) の書簡で「我々のクリソストモス Chrysostomus」と呼ばれている¹⁰⁾。また、イタリアの法学者でボローニャ学派のブルガリ Bulgari (1167年没) もそのようにあだ名されていた¹¹⁾。

中世前期の研究で欠かせない史料が『フランク史 Historia Francorum』(または『歴史十巻』)と『アンゲル人の教会史』である。ここではその著者に付されたあだ名について少し触れておくことにする。前著の作者で、その後の聖者文学の手本となる作品を残しているトゥール司教グレゴリウス (540-594年) が9世紀の聖者伝で、ある聖者伝の先行する有名な作者とし言及され、Praesules Gregorius Historicusの如く、司教グレゴリウスの後に「歴史家」の語が添えられて現れている¹²⁾。たぶん、聖者伝作家としてよりも、『フランク史』の作者

7) MGH, Epist, IV, n° 92, p.135.

8) MGH, AA, 11, p.16 (拙著『金持ちの誕生』p.78)

9) Du Cange, VI, p.70.

10) Ibid.

11) A. Franklin, *Dictionnaire des noms, surnoms et pseudonymes latins de l'histoire littéraire du Moyen Age (1100 à 1530)*, Paris, 1875, col.113.

としての名声のほうが格段に高かったためであろう。ここでの「歴史家」とは今日の意味よりも狭く、歴史叙述の1ジャンルである *Historia* を書いた人の意味である。この *Historia* とは必ず天地開闢から書き始められ、年代記 *Chronica* や編年記 *Annales* よりも分量が多く、出来事やその発生年を重視することに加えて、自己主張が込められていることを基本的特徴とする¹³⁾。

他方、後者を書いたのは尊者ベダ *The Venerable Bede* (673-735年) である。この美称辞は高位聖職者に限らず、聖職者の尊称として一般に広く使用されている。ベダには、このあだ名はすでに9世紀から付けられていたようである¹⁴⁾。彼は聖人であったほか、神学や天文学に関する著作を残している。しかしよく言及されるのは、「『*アングル人の教会史*』のなかで彼について非常に美しく言及している尊者ベダ¹⁵⁾」、「信頼に値する真実と健全な教義によって、既に教会の権威に加えられている『*アングル人の教会史*』のなかで、祝福されたリンディスファーン司教カスバートに言及している司祭の聖ベダ¹⁶⁾」の如く、歴史家としてである。現代人にとっては、尊称との間に、少し違和を感じる。17世紀のある研究者はあだ名の由来について、奇蹟を起こしていないので「聖者」の尊称は不適切であったと述べる一方で、ベダの墓碑銘を書く修道士が有能でなかったために起きたとする見解も紹介している。つまり、墓碑銘は厳しい決まりのあるヘクサメタで書かれるため、言葉を自由に選ぶことが出来ず、1語空欄にしたまま夜が明けると、そこには天使によって空欄が適切な語、つまり月並みな語で埋

12) AASS, Junii 2, Vita. s. Medardi, p.82, 85. 2度言及されているが、2度目では司教の肩書が省略されている。

13) Cf. B.Guenée, *Histoire et culture historique dans l'Occident médiéval*, Paris, 1980, p.203-7.

14) *Bedae opera historica*, 2 vol., ed. J.E. King, Cambridge/London, 1979-1990, vol.,1, p.XXI.

15) AASS, Janv 2, p.53.

16) AASS, Julii 6, p.215.10世紀に書かれた皇帝伝では、同じ文章のなかでグレゴリウス大教皇は「聖者 *sanctus*」とあるのに対して、このビードは「いと博識な *doctissimus*」としか呼ばれていない。Cf.MGH, SS, 2, p.731, 759.

められていたとのことである¹⁷⁾。

学者の場合、よく使用される言葉がいくつか確認される。その1つが「博士 Doctor」である。A. フランクリンは1530年までにこのように呼ばれた人物を92名拾い出している¹⁸⁾。もちろん、この言葉だけが用いられているのではなく、これに形容詞や名詞が付されて、専門分野の限定が行われている。『神の国』の著者、聖アウグスティヌスの同時代人で、旧約をヘブライ語から、新約をギリシア語からラテン語に翻訳して、カトリック教会の唯一の正典とされるウルガータ版を完成させた聖ヒエロニムス（420年没）は、中世にはいると、最高級の形容詞であるが、「最高に博識な父」と呼ばれている¹⁹⁾。グレゴリウス（1世）大教皇が7世紀の聖者伝のなかで「大博士 magnus Doctor」²⁰⁾と呼ばれているほか、数名の教皇にもこの美称辞が付されている²¹⁾。聖人のなかでもこのように呼ばれている者がいる。聖ウィリブロール Willibrord（739年没）は中部イングランド、ノーサンプリアの出身で、アイルランドで布教のための教育を受け、690年頃フリースランドに派遣され、11名の修道士と共に布教を開始する。ローマ教皇庁の支援を受けてユトレヒトに司教座を設置し、その地域の活動の拠点とする。彼は「クレメンス」（「慈悲深い」の意）と同時にフリースランド人の「博士」と呼ばれたとある²²⁾。聖ヴェルフラン（704年没）も2年ほどサンス司教職にあったが、数名の修道士とともにフリースランドの布教に出発する。布教後、北フランスのサン・ヴァンドリュ修道院に隠遁するが、彼は「キリスト教徒の博士」²³⁾と呼ば

17) Th. Fuller, *The Church History of Britain*, 6 vol., Oxford, 1845, vol. 1, p.256-7.

18) Al.Franklin, *Dictionnaire*, col. 202-207.

19) AASS, Apr 2, p.648.

20) Vita s. Desideri, AASS, Maji 5, p.254; Sept. 2, p.547.

21) インノケンティウス5世, アレクサンデル5世などがそうである。Cf. Al.Franklin, *Dictionnaire*, col.204, 206.

22) MGH, SS, 15, p.75.

23) V. s. Vulfranni, AASS, Marti 3, p.146.

れていたとある。この聖者の11世紀後半に書かれた奇蹟譚には、並はずれた知識によって哲学者 Philosophus と呼ばれたジェルベールが登場しているが、これが後の教皇シルヴェステル2世(999-1003年)である。彼がローマを訪れたとき、彼の博識ぶりは教皇ヨハネス13世とオットー大帝を驚かせたほどであったと言われている²⁴⁾。中世盛期に入って、ピエール・アベラール(1142年)に「不敗の博士 Doctor invincibilis」または「フランスの蜂 Apis de Francia」といったあだ名が付されている²⁵⁾。彼はエロイーズとの恋愛書簡²⁶⁾で有名であるが、論理学においても権威に従うのではなく、「然りと否」による理性的な討論による解決を提唱して重要な役割を演じ、その弁舌は大勢の識者や大学生を魅了したのである²⁷⁾。そして、中世スコラ哲学の集大成である『神学大全』を著したトマス・アクィナス(1274年没)は「天使の博士」、「天使ケルビムの如き博士」、「万人の博士」、「福音の博士」のほかに、「学問の天使」、「神学の驚」と美称辞に事欠かなかった²⁸⁾。

次に多いのが「光明 Lumen」、「灯火 Lucerna」、「照明 Lux」といったものである。「光明」と「灯火」はとくに法学者に多く見られる。中世後期に入り、各地で都市が興隆するなか、法学者たちは復活したローマ法を武器に、都市統治の整備・強化に関して、各地から学生が集まっていた大学を拠点に論陣をはった。「法の光明 Lumen juris」と呼ばれたジャコモ・ボットリガリは13世紀初期のボローニャ学派を代表する法学者で、ローマ法の復興に専心し、彼の講義には外国

24) J. Laporte, *Inventio et miracula sancti Vulfranni, Mélanges de la Société de l'histoire de Normandie*, 1938, p.49; Gerbert d'Aurillac, *Correspondance*, 2 vol., Paris, 1993, t.1, p.VII.

25) A. Franklin, *Dictionnaire des noms*, col.1.

26) 『愛の往復書簡—アベラールとエロイーズ—』(佐藤輝夫訳 角川書店 1966年)

27) アベラールに関しては、E.ジルソン『アベラールとエロイーズ』(中村弓子訳 みすず書房 1987年)参照。

28) A. Franklin, *Dictionnaire des noms*, col. 35. トマス・アクィナスに関しては、稲垣良典『トマス=アクィナス』(清水書院, 1992年)参照。

からも大勢の学者が訪れ、彼の論文は中世を通じて最高の権威をもち、彼の『大全』は1402年から200年間に31版を重ねるほどの人気であった²⁹⁾。彼の1代前にボローニャ学派を代表したポルティウス・アゾにも「法学の光明 *Lumen juriscontultorum*」や「法の泉 *Fons legum*」のあだ名が付けられている³⁰⁾ イングランドのイーヴシャム修道院長トーマスは、若い時ボローニャに滞在し、6月間毎日彼の講義を聴いたとのことである。もちろんそれ以外の学者にもつけられている。「諸学の光明 *Lumen omnium*」と呼ばれた、イタリアの神学者ペトルス・ロンバルドゥスはボローニャやフランス各地で学んだあと、パリの学校で教え、神学者として名声を博し、代表作の『命題論集』は17世紀まで神学教科書としてヨーロッパの多くの大学で使用され続けた。1159年にはパリ司教に任命されたが、その翌年に没している³¹⁾。上記のボローニャ学派の創始者と言われ、12世紀初期に地元の伯や皇帝ハインリヒ5世に仕えて活躍し、ローマ法大全の文献学的研究をともなった釈義研究を企てたイルネリウスは「法の光明 *Lumen juris*」、*「法の灯火 *Lucerna juris*」*のあだ名を獲得している³²⁾。それに対して「照明」にはそのような特殊性は認められない。ドイツの医師兼神学者で、ライプチヒ大学教授を務めたあと、ウッテンブルク大学を創設したマルティーン・ポリヒ *Martin Pollich* (1513年没) は、その知識の広さから、「世界の照明 *Lux mundi*」と呼ばれていた³³⁾。

同じく、法学者の間には、「君主 (帝王) *monarcha*」の異名を取る人々がい

29) A. Franklin, *Dictionnaire des noms*, col. 118. このジャコモ・ボットリガリを含め、以下の登場人物の経歴、作品などについては、*Dizionario biografico degli Italiani*, Roma, 1960-; *Grand dictionnaire universel du XIX^e siècle*, 24 vol., Paris, 1873; *Grand Larousse encyclopédique*, 10 vol., Paris, 1963, 『世界大百科事典』(平凡社, 31巻, 1993年)などを参照した。

30) *Ibid.*, col. 54.

31) *Ibid.*, col. 349.

32) *Ibid.*, col. 311.

33) *Ibid.*, col. 464.

た。その1人がイタリアの有名な法学者で、ボローニャ学派の最大の代表者であったバルトロ・ダ・サッソフェットロ Bartolo da Sassoferrato (1357年没) である。彼は法学の勉強をペルージャ大学で始め、20歳のときボローニャ大学で博士号を取得する。ピーサ大学教授をへて、ペルージャ大学で教えていたとき、ローマ法大全に加えた新しい注解によって偉大な名声を獲得し法の最高の注釈者と呼ばれはじめ、そのためイタリア全土からすべての学生がこの地に殺到したとのことである。晩年、ペルージャ市の代表として皇帝カール4世のもとに派遣されたとき、同皇帝から法学者として最高の名誉と特権を賜った。また、広くヨーロッパ諸国の法学と法実務に重大な影響を及ぼし、「バルトロの徒にあざれば法律家にあらず」とまで言われた。これ以外に、彼は「法の舵取りにして御者 Dux et Auriga juris」, 「法の灯火 Lucerna juris」, 「法の鏡 Speculum juris」とも呼ばれていた³⁴⁾。「法の君主」はバルトロメオ・サリケティ Bartolommeo Saliceti (1411年没) の異名でもあった。彼はボローニャの有名な法学者の家庭に生まれ、同地の大学で叔父のリカルドから市民法の講義を受け、ギラルダッチの『ボローニャ史』によると、1365年には母校で市民法を教えていたようである。しかし、教皇代理の悪政によって70年から4年間、活動の中心がパドヴァ大学に移っている。その後市の代表として教皇側と何度も折衝を重ねたり調停役を果たしりする。1389年再び暴動が起きると、フェラーラに亡命し、そこで10年間『勅法彙纂』と『学説彙纂』の講義をおこなう。ボローニャに帰郷するが、再度パドヴァに亡命し、最後はボローニャに戻ってきている。35年を費やして『勅法纂彙』の注釈書を完成させている³⁵⁾。また、16世紀のフランスの法学者で、フランス法の発展に大きな影響を与え、国際私法学上の貢献でもよく知られているデュムラン (Ch.Dumoulin) がその著作を愛読した、イタリアの有名な法学者で、パド

34) *Ibid.*, col. 65.

35) *Ibid.*, col. 508.

ヴァ大学, ボローニャ大学, フェラーラ大学で教授を歴任したアレッサンドロ・タルターニ Alessandro Tartagni (1477年没) もこの異名で呼ばれていた³⁶⁾。

クレモーナ出身の有名な教会法学者, ジョヴァンニ・バッシアーノ Giovanni Bassiano (1197年没) は「世界の鏡 Speculum mundi」と呼ばれていた。「法の光明」と呼ばれていた, ボローニャ学派の始祖イルネリウスから教えを受けた4博士の1人ブルガロの弟子で, 自らも師の後を継いでボローニャ大学の教授となる。彼の多才ぶりはローマ法の構造解明のための独創的な論理構成とその中に含まれる異質な要素への取り組みに最も発揮され, 最近の研究によると, 14世紀の有名な『チェルヴォットの注釈』に彼の説が大量に引用されているのが発見されている³⁷⁾。他方, 「探究者 Speculator」の異名をとるギヨーム・デュラン Guillaume Durand (1296年没) は南フランスの貴族の出身で, リヨンとボローニャで法学を学び, モデナ大学で教会法を教える。フランス出身の教皇クレメンス4世によって教皇庁に招かれ, 次教皇グレゴリウス10世に同行して第2リヨン公会議に出席しその綱領を作成する。教皇特使としてボローニャやその他の都市の忠誠を受ける。ロマーニャとアンコーナの知事に任命される。マンデ司教に任命されるがイタリアにとどまって紛争の解決に専心し, ラヴェンナ大司教への就任も断る。このように11人の教皇に仕えた彼は民法, 刑法, 教会法の訴訟手続を総括した『訴訟鑑 Speculum iudiciale』を残している。このローマ法と教会法の百科全書的な総合の書はその明晰さ, 方法論, 実務性に秀でていて, 大学のみならず法廷においても永く信頼を維持した。彼の異名もこの書から来ているし, 「訴訟手続きの父 Pater practicae」とも呼ばれていた³⁸⁾。

「法の豊饒 Copia legum」とあだ名されていたマルティノー・ゴシア

36) *Ibid.*, col. 559.

37) *Ibid.*, col. 98.

38) *Ibid.*, col. 215.

Martino Gosia (?-1160年) はイタリアの教会法学者でボローニャ大学教授。イルネリウスから直接教えを受けた4博士の1人で、ユステニアヌス法典の編纂意図に反してそこに公正よりも神の法を追求しようとしたため、自然法と神の法との一致をめぐる、4博士の1人で「黄金の口」とあだ名されたブルガリと対立する³⁹⁾。「法の規範 *Norma legum*」の異名を取ったのが、イタリアの有名な教会法学者のジョヴァンニ・アンドレア Giovanni Andrea (1348年没) である。最初は父親から教育を受けたあと、ボローニャ大学で本格的に法学を勉強する。パドヴァ大学とピーサ大学で教えた後、ボローニャ大学の教会法の教授となり、合計45年間も教壇に立つことになる。その間トリテミウス、バルドゥス、フォスター、ベラーミンなどの有名な学者を世に送り出したが、1348年ヨーロッパを襲った黒死病の犠牲となる。このほか、「教会法の泉 *Fons canonum*」, 「法規の照明 *Lux morum*」, 「博士の中のラビ *Rabbi doctorum*」とも呼ばれていた⁴⁰⁾。

「真実の装置 *Organum veritatis*」と呼ばれていたのが、ラヴァーニャ伯ウーゴの息子であったシニバルド・フィエスキ Sinibaldo Fieschi (1254年没) である。彼はパルマとボローニャで勉強し、一時期ボローニャで教会法を教える。イタリアの神学者で法学者、後に1243年に教皇に選出されたインノケンティウス4世となる。このほか、「法の父 *Juris pater*」とも呼ばれていた⁴¹⁾。この家系からは2人の教皇、72名の枢機卿、大勢の将軍、総督、大使などを輩出している。「真実の愛好者 *Amator veritatis*」と呼ばれていたベネデット・カプラ Benedetto Capra (-1470年) は1390年代に、ペルージャの公証人の家に生まれる。ボローニャで法学を修める。1422年からペルージャ大学で教壇にたち、4年後に教令集に関する最初の本を出版する。結局50年間大学で教えたことになるが、

39) *Ibid.*, col. 273.

40) *Ibid.*, col. 25-26.

41) *Ibid.*, col. 242.

その間、都市当局の公設弁護士、登記局の役人、造幣局の諮問委員などを歴任する。大学内のみならず市の有力者としての広範な活動からこのあだ名が由来していたと考えられる⁴²⁾。そして、「精緻の第一人者 Princeps subtilitatum」とも呼ばれるアッコルティ Francesco Accolti は1416年にアレッツォで生まれ、シエーナで法学を修める。フィレンツェ滞在後、1450年にフェッラーラ大学の法学教授に就任する。シエーナに移って法学部の教授になるが、度重なる帰国の要請をうけて、1457年フェッラーラに戻って教授となる。この間ミラノ公フランチェスコ・スフォルツァの顧問としてミラノの行政に助言をあたえ、1461年にはミラノに移って、彼の代理人としてローマに派遣されるなどして重要な業務を遂行する。1466年の同フランチェスコの死後は、シエーナとピサの大学で法学を講義する⁴³⁾。

最後に、あだ名が付された哲学者にも触れておこう。プセッルス Michael Constantinus Psellus は1020年、コンスタンティノーブルの有力者の家に生まれ、アテネで勉学に励む。故郷に戻って諸皇帝に仕え、数学、哲学、医学、弁論、錬金術に秀でた百科全書家的才能から、「哲学者の第一人者 Philosophorum princeps」の称号を賜る⁴⁴⁾。彼の後を継いだのが、同じく「哲学者の第一人者」と呼ばれたイタルス Joannes Italus (1100年頃没) で、その名前からイタリア人であった。コンスタンティノーブルでは哲学者として活躍し、とくにプラントン、アリストテレスの解釈家として名をなした。しかし、彼は魂の性質と聖像崇拜に関する書を著したため、聖職者によって異端として告発され、その本は発禁処分にされた⁴⁵⁾。その300年後、アンドロニコス・パレオロゴス帝 (1328-1341年) の時代に公文書館で仕事をしていたことが知られているペディアシムス Joannes Pediasimus (1400年頃没) も「哲学者の頭」と呼ばれている。彼は

42) *Ibid.*, col. 449.

43) *Ibid.*, col. 3.

44) *Ibid.*, col. 473-4.

45) *Ibid.*, col. 312.

Galenus, Pothus とも呼ばれていたようであるが、今日彼の著作のうち、文法、数学、天文学、音楽、哲学、文法、詩などに関する、少なくとも19冊が伝来している⁴⁶⁾。他方、表現は少し異なるが、イタリアにおいても「哲学の父 Philosophiae parens」と呼ばれた人物が現れている。それはボローニャ出身のスコラ哲学者ウルバヌス（1503年没）で、パリ、パドヴァ、ボローニャの大学で教鞭をとった。また、アリストテレス哲学の汎神論的解釈者であるアラブ人、アヴェロエスの影響を強く受けていたことから、「アヴェロエス主義者」ともあだ名されていた⁴⁷⁾。

46) *Ibid.*, col. 446.

47) *Ibid.*, col. 94.

第4章 国王とあだ名

M.ブロックの『王の奇蹟』では、奇蹟を起こす人としての評判を保つために相当な予算が毎年費やされていたことが明らかにされている¹⁾。他方、修道院も意図的に奇蹟を起こさせる政策をとっていたことが明らかにされている²⁾。ここから、国王、聖者のもつ2面性が浮かび上がってくる。現実はそうでなかつたので、政策的にそれを造り上げようとした。つまり、現実の国王、聖者はそうではなかつたことになる。それでは、現実の姿、庶民に映った姿とはどんなものであつたのか。これを探る手段にあだ名が使えるのではなからうか。

本論に入る前に、U.シュヴァリエ著『中世歴史史料総監—人名編—』³⁾に依拠して、中世ヨーロッパの国王・諸侯に付けられたあだ名の一般的傾向を見ておくことにしよう。

資料 ヨーロッパの国王・諸侯に付けられた代表的なあだ名 (単位:例)

le Grand(偉大な)	58	le Pacifique(平和な)	9	le Victorieux(勝利者)	7	le Mauvais(悪い)	6
le Jeune(若い)	32	le Beau(美しい)	9	le Hardi(大胆な)	7	le Lion(ライオン)	5
le Bon(善良な)	30	le Gros(太った)	9	le Bossu(せむし)	7	l'Aveugle(盲目)	5
le Vieux(年とった)	27	le Riche(金持ち)	9	le Gras(太った)	7	le Fort(強い)	5
le Pieux(敬虔な)	14	le Guerrier(戦士)	8	le Blanc(白い)	7	le Chauve(禿頭)	5
le Sage(賢い)	13	le Noir(黒い)	8	le Courage(勇敢な)	6	le Petit(小さい)	5
le Barbu(髭の)	12	le Débonnaire(温厚な)	7	le Vaillant(雄々しい)	6	Taillefer(鉄を裂く)	4
le Roux(赤い)	11	l'Ancien(古い)	7	le Boiteux(びっこ)	6	Martel(鉄槌)	4

1) M.Bloch, *Les rois thaumaturges*, Paris, 1961 (井上・渡邊訳『王の奇蹟』刀水書房 1998年)

2) Cf. P.A.Sigal, *Maladie, pèlerinage et guérison au XII^e siècle: les miracles de saint Gibrrien à Reims*, *Annales E.S.C.* 24 (1969), p.1522-1539.

3) U. Chevalier, *Répertoire des sources historiques du Moyen Age. Bio-Bibliographie*, 2 vol., New York, 1960.

この表（32項目，316例）からは，いろいろな要素が含まれている偉大さ（58）を除くならば，年齢3（46例），頭脳1（13），身体・容姿9（65），性格4（43），武勇9（52），色彩3（26），信仰1（14），富1（9）に分類される。中世という時代的な性格から武勇の多さは理解できる。信仰は指導者には不釣り合いなものであったことになるし，支配者の属性に数えられる富が強調されることが少なかったことも納得できる。年齢は老若を意味しているよりも，とくに同名者の場合は，先行者と後任の区別を明瞭にするための手段であったと考えられる。容姿に関するものが多いこと，その中に差別的なものも含まれていたことはどのように説明することが出来るのであろうか。時代の性格から戦争に強い者が称讃されるが，平和が回復してくると，そのような支配者を民衆は望まなくなるであろう。しかし，平和回復の時期は国によって異なっていたため，何世紀からあだ名にそういった変化が現れるようになったかを確定することは出来ないし，また意味のないことである。ともあれ，中世の民衆が国の指導者に望んだことは偉大さであったことは間違いない。

I. メロヴィング王朝

同じフランク族でありながら，次のカロリング家と異なって，あだ名をもった王は1人も確認できない。これは，上述の如く，この時代にあだ名の慣習がなかったことを意味するものではない。あだ名は美称辞から発していることが多い。しかし，メロヴィング王に関しては，それが一定していない。従って，あだ名として定着できないことになる。

ゲルマン民族の移動に際して，バルト海沿岸に居住していたと思われるフランク族（特に，その中のサリー族）はライン川を越えて，北部フランスに小部族にわかれたまま定住する。5世紀末ごろ，メロヴィング家のクローヴィスがこれらを統一し，中部ガリアにまで領土を拡大したことが知られている。この家名の起

源はフランク族の王、長髪のクロディオンの息子とされるメロヴェウス (Meroveus, Mérovée) に遡る⁴⁾。但し、ずっと後の書物を除くならば、彼の名前は451年、ローマの将軍アエティウスの指揮下でアッティラと戦って勝利したカタラウヌムの戦いに関する話のなかでしか登場してこないのではあるが⁵⁾。メロヴィング諸王を意味する Merovingi の語は後述される、アインハルトの『カール大帝伝』のなかに既に出てきている⁶⁾。

メロヴィング時代においても、あだ名をもった人物は登場しているが、その数は非常に少ない。単純なものから示すと、フォントネル修道院長、聖ヴァンドリル (668年没) は単に名前 Wandregisillus をちぢめてヴァンド Wando と呼ばれていた⁷⁾。6世紀後半にシャロン司教職にあったデズイレ (Desiré, Didier, Desideratus) が Deddo とよばれていたのも、これと同じであろう⁸⁾。Witrimund が Atto と呼ばれていたとあるが、その意味は定かでない⁹⁾。

次に、性格が投影された、語呂合わせのようなものとして、「冷酷者 frigidus」にあだ名されたフレデギスス Fredegisus が挙げられる。彼は封として聖ベルタン修道院を手に入れると、80人いた修道士のうち30人を参事会員と入れ換え、修道院財産の3分の1を後者の使用にまわし、これまで10名の院長たちによって築かれてきた秩序を破壊したと、聖者伝の作者は述べている¹⁰⁾。他方、サン・ニジ

4) 7世紀の偽フレデガリウスや11世紀の年代記作家アデマール・ド・シャバンヌもこのメロヴェウスの代からフランク族の王がメロヴィング朝王と呼ばれるようになったと言っている。Cf. *MGH, SSRM*, 2, p.95; Adémar de Chabannes, *Chronique*, ed. J. Chavanon, Paris, 1897, p.7.

5) F.Lot, *La fin du monde antique et le début du Moyen Age*, Paris, 1968, p.230. 但し、その後の研究ではこの名称を実在した王の名前ではなくて名祖にする見解が有力になっているが。Cf. L.Musset, *Les invasions. Les vagues germaniques*, Paris, 1969, p.120.

6) *MGH, SS*, 2, p.443.

7) *AASS*, Juli 5, p.266, 272.

8) *AASS*, Oct 1, p.469.

9) *AASS*, Aug 5, p.186.

10) *AASS*, Sept 2, p.618-619.

エ修道院長からブルジュ司教に選ばれた聖オストルジズイル（624年没）には「タオル係 Mapparius」のあだ名が付いていた。王ゴントランの宮廷で騎士として育てられていたとき、同王が洗った手を拭くのにいつも使っていたとタオルを差し出す役についていたので、こう呼ばれていたとある¹¹⁾。聖者はすべて「聖者」と呼ばれていたのであるが、北イングランド出身の修道士、聖エグバート（729年没）は存命中から、名前を付すことなく、ただ「聖者 Sanctus」とだけ呼ばれていた。彼は若いときアイルランドに渡って厳しい禁欲生活のもとで勉学に励み、帰国後、ゲルマン諸部族の布教のための優秀な人材の育成に専念する。スコットランドのアイオナにローマ式典礼を導入した人としても知られている。ベーダの『アングル人の教会史』で「最高の聖なる父」なる美称辞が付されている¹²⁾。布教の地、ユトレヒトで8世紀末に書かれた聖者伝にある「聖者」は布教の父といった意味が込められていたのであろう¹³⁾。

他の時代と同様、国王にも美称辞が付されている。しかし、その例は少なく、作者によって異なっていて定着することがない。ここにあだ名としての定着を阻止する原因があったと思われるが、その原因を明らかにすることは出来ない。カロリング時代におけるあだ名の多用を考えた場合、このようなあだ名への対応の違いは何に起因しているのであろうか。

メロヴィング朝の開祖、クローヴィス1世は「大王 Magnus」と呼ばれているが、これは中世盛期の史料でしかない¹⁴⁾。同時代の人々にはクローヴィス「老王 senior」として知られていたようである¹⁵⁾が、これがあだ名であったかどうかは不明である。507年のヴァーイエの戦いでクローヴィスは西ゴート王アラリッ

11) AASS, Maji 5, p.60.

12) Bede, *Historical Works*, 2 vol., transl/ed. J.E. King, Cambridge/London, 1979, vol.1, p.342.

13) AASS, OB, 3, p.564; PL, 101, col.696.

14) AASS, Julii 1, p.61.

15) AASS, Janv 2, p.231; PL, 137, col.799.

ク 2 世を撃破するが、その時同王には「常勝王 *victoriosissimus*」という形容詞が付されているのである¹⁶⁾が、これはよく見かける美称辞の 1 つである。後世の作品でクローヴィス 1 世の 3 男、シルドベール 1 世に「尊厳者 *Augustus*」が付されている¹⁷⁾が、皇帝でなかったことは明らかで、この美称辞の由来を知る手がかりを見つけることができない。メロヴィング朝で最強の王、周辺諸王によって最高の支配者として尊敬されたダゴベール 1 世ではなくて、その父、クロテール 2 世に「大王 *Magnus*」のあだ名が付されている¹⁸⁾が、その由来も確かでない。生後 4 月で王位につき、母と叔父、ブルゴーニュ王ゴントランの後見のもとで王国を統治し、成人してはフランク王国の統一に成功したことに由来するのであろうか。しかし、同王は直ぐに諸侯に大きな譲歩を迫られ、宮宰にもその世襲権を認めてしまったようである。他方、3 名の王に「若王 *junior*」を意味する言葉が添えられている¹⁹⁾が、これは恐らく、先代の同名の国王 — 「老王 *senior*」の語が添えられている — の記憶がまだ残っていたため、区別する目的でこの語が使用されていたのではなかろうか。

クローヴィス 2 世の長子、シルデリック 2 世に「強者」のあだ名が付されている²⁰⁾。彼はアウストラシア王になったあと、晩年には 3 つの王国を統一に成功するが、アウストラシア王になったのは自力によるものではなくて、ネウストリア王国とブルゴーニュ王国の諸侯と宮宰の対立を利用してのことであったし、統一後の 4 年目に暗殺されている。また、クローヴィス 2 世の次子、クロテール 3 世に「幼王 *Minor*」を意味する語が添えられている²¹⁾が、これはあだ名ではなくて、母親の後見のもとで幼くして王位についたことを意味していたと思われる。

16) AASS, Aug 6, p.69.

17) AASS, Juli 1, p.83.

18) AASS, Junii 3, p.59.

19) AASS, Marti 3, p.145; Maji 3, p.390; Aug 6, p.98.

20) AASS, Sept 1, p.278.

21) AASS, Oct 1, p.486.

以上から、メロヴィング時代にあだ名の習慣は存在していたが、王家に関する限り、当時の人々に親しまれたあだ名はなかったことになる。このことは、両王朝の王が問題になっている聖者文学作品において、あだ名はカロリング諸王にしか付されていないことによっても確認することができる²²⁾。もちろん、あだ名の普及は、それと大いに関係していたと思われる作品の数量上の推移を考慮に入れなければならないであろう。聖者文学作品に関する限り、古代は110編、メロヴィング時代は86編に対して、カロリング時代は214編、中世盛期は231編と、メロヴィング時代とそれに続く時代との間に大きな差があるのみならず、時代とともに個々の作品の分量が著しく増加してもいる²³⁾。

II. カロリング王朝

1737年から始まったフランスにおける史料編纂事業を代表する『ゴール人とフランスの歴史家集成』にはクローヴィスから1328年のカペ朝断絶までの膨大な数の国王文書が収録されている²⁴⁾。このなかのカロリング王家出身の諸王の文書を見ると、上述のノルマンディ公ギヨームやアンジュ伯ジョフロワやフルクの手簡や文書²⁵⁾の如く、一部にあだ名が付されているのがある。これから、諸王は自らあだ名を使用していたと結論しても良いのであろうか。もちろん、それは間違っている。数は少ないが、オリジナルの王文書が伝存しており、そこにはあだ名は

22) リゴールは『フィリップ尊厳王事績録』のなかで、メロヴィング諸王とカロリング諸王を列記しているが、前者に関してはあだ名が付されていない。Cf. *Œuvres de Rigord et de Guillaume le Breton*, 1, p.59-60,174; *Chroniques d'Anjou*, ed. P. Marchegay et A. Salmon, Paris, 1856, p.18-31.

23) この数値と作成年は A.Molinier, *Les sources de l'histoire de France des origines aux guerres d'Italie (1494)*, 6 vol., Paris, 1901; F.Lot, *Vitae, passiones, miracula, translationes Sacntorum Galliae (500-1000)*, *Archivium latininitatis Medii Aevi (Bulletin du Cange)*, 14 (1939), p.181; 20 (1950), p.55-64に依拠している。

24) *Recueil des historiens des Gaules et de la France*, 24 vol., Paris, 1737-1904.

25) 本誌46の2, 129頁参照。

どこにも認められない。王文書の大半は宗教組織の文書集のなかにコピーされて伝存するに過ぎない。従って、コピーをするに際してか上記の集成を編纂するに際して、同名王を区別するためか親しみを込めて、このあだ名が付け加えられたと考えられる。確かなことは、フランク時代の王文書に関して、あだ名が付されたものは伝存していないということである。従って、いつ頃、どのような経緯で諸王がこのようなあだ名で呼ばれるようになったのか、その意味は何であったのかを探っていくかねばならない。

カロリング Karolingi という家系名の由来であるが、メロヴィング家のような古い祖先の名前に遡るのではなくて、この家系の中で最も偉大であったカール大帝の名前 Carolus (または Karolus) を基にして後世の人々によって作られたものに過ぎない。因みに、その初出はコルヴェイの修道士ウイドキンド (980年頃没) の『ザクセン諸王事績録』で確認される²⁶⁾ のに対して、フランスでは11世紀初期のアデマール・ド・シャバンヌの作品にはまだ現れていない。

1. カール・マルテル Charles Martel (741年没)

アウストラシア王国の宮宰ペパン—「ヘルスタルのペパン Pépin d'Héristal」または「肥満のペパン Pépin le Gros」と呼ばれている²⁷⁾—が愛妾アルパイダとの間に生ませたのが、このカールである。今日、彼はカール・マルテルとして広く知られているが、彼には同じくらい古くからトゥディテスというあだ名を持っていたようである。どうして、マルテルのあだ名が生き残ったのであろうか。その前に、彼の功績に少し触れておくことにする。

7世紀後半、フランク王国を統治していたメロヴィング王家の権威は衰え、同

26) Widukind, Lib 1, cap.29, in *MGH, SS*, 3, p.430. Cf. F.Lot, *Origine et signification du mot Carolingien*, in Id., *Les derniers Carolingiens*, Paris, 1891, p.301-307.

27) *Vita s. Dodonis*, AASS, Oct 12, p.634)

家の家政をとり仕切っていた宮宰が実権をもつようになった。宮宰の職にあった晩年、彼はイベリア半島からピレネー山脈を越えて侵入してきたイスラム軍を732年トゥール・ポワティエ間の戦いで破り、フランク王国とキリスト教を外敵から護った。宮宰はこの功によって王国の事実上の支配者となり、次に述べる、小ピピンは、ローマ教皇の支持を得て、751年メロヴィング朝を廃して、王位につき、カロリング朝を始めたのである。

彼の2つのあだ名であるが、マルテル (Martellus: martulus (「鉄槌」の意)の指小辞) もトゥディテス (Tudites: tudes (「金槌」の意: tundo (「打つ」の意)の派生語)の複数形) も意味は同じである。11世紀の年代記作家アデマール・ド・シャバンヌはサラセン軍に勝利して凱旋したときに、このあだ名が付けられた²⁸⁾と記しているが、8世紀末に北部フランスで作成された聖者伝では、孫のカール大帝との関係から、「老カール Karolus antiquus」としてしか登場してこない²⁹⁾。9世紀に入ると、これらのあだ名が定着し始め、由来も記されるようになる。聖リゴベール伝では、カールは気性の激しさ、成人して好戦的な男となったこと、そして並はずれた強さによって「鉄槌」とあだ名されるようになった³⁰⁾とある。しかし、「金槌」の方も広く普及していたようで、3つの作品で「金槌または鉄槌」「金槌、つまり鉄槌」とある³¹⁾。12世紀の史料には、トゥディテスとは鍛冶屋の鉄槌のことで、全世界が鉄槌によるが如く、叩き潰された tunduntur。こうしてカールは近隣の王国すべてを統合したのである³²⁾とある。

28) Adémar de Chabannes, *Chronique*, p.52.

29) *Vita. s. Willibrordi*, AASS, OB, 3, p.571.

30) *Vita s. Rigoberti*, AASS, Janv 1, p.176.

31) *Vita s. Sigeberti*, AASS, Feb 1, p.229; *Vita s. Prudentii*, *ibid.*, Oct 3, p.350; *Vita s. Lamberti*, *ibid.*, Sept 5, p.597.

32) E. Pérard, *Recueil des plusieurs pieces curieuses servant a l'histoire de Bourgogne, choisies parmi les titres les plus anciens de la chambre des comptes de Dijon, des abbayes et autres églises considérables et des archives des villes et communautés de la province*, Paris, 1654, p.126.

こうした動詞派生説は、数多の民族を撃破し屈服させて征服した *contuderit* (下線筆者、以下同様) ため、そのあだ名がつけられたとある『聖アマルベルジュ伝』でも確認される³³⁾。上記の諸例は12世紀の人々にはテュデテスの意味が分からなくなっていたことを明らかにしてくれている。しかし、このカールに付けられた2つのあだ名は中世において1つに統一されることはなかった³⁴⁾。

2. ペパン短軀王 Pepin le Bref (在位751-768年)

10世紀の聖者伝のなかで、「確かに体は小さい *parvus* が、力は大い³⁵⁾と、背丈の低さが明らかにされている。実は、このあだ名をもった人物は彼が初めてではなくて、彼の祖父もそのようなあだ名を頂戴していたようである³⁶⁾。また、彼の息子であるカール大帝にも^{せむし} 僇僕^{せむし}のペパンという名の息子がいて、アインハルトは正妻の子供と区別して扱い、「顔は美しかったが、^{せむし} 僇僕であった」と軽蔑を込めて書いている³⁷⁾のであるが、その背景には父に対して謀反を企てたことがあったと考えられる。しかし、身体的特徴があだ名になっている場合、いつから史料に登場してくるかはまったく問題にならない。今日の如く、写真もなければ、肖像があつたとしても、正直に描かれたものはなかったであろうから。従って、このような特徴は実際に目撃した人によって付けられ、広まったと考えられる。他方、アデマール・ド・シャバンヌの作品では「敬虔」として出てくる³⁸⁾。その

33) *Vita s. Amalbergae*, AASS, Julii, 3, p.100.

34) Ordericus Vitalis, *Ecclesiasticae historiae libri tredecim*, ed.A. Le Prevost, Paris, 1855, 2, p.351. 《Tunc in Francia Carolus Tudites id est Martellus, dominabatur》; *Oeuvres de Rigord et de Guillaume le Breton*, 1, p.58, 60, 174. 《Karolus Martellus》; Adémar de Chabannes, *Chronique*, p.52. 《Carolus…, et tunc omnes ceperunt eum cognominare Martellum, quia sicut martellus cunctum ferrum subigit, sic ipse, Deo adjuvante, cuncta prelia frangebatur》 Cf. *Miracula s. Genulphi* (11世紀初頭以前の作), AASS, OB, II, V.

35) AASS, Julii 4, p.442.

36) *Vita s. Prudentii*, AASS, Oct 3, p.350.

37) *MGH, SS*, 2, p.454.

38) Adémar de Chabannes, *Chronique*, p.68.

理由としては、イタリア遠征を行ってロンバルド族を討ち、中部イタリアのラヴェンナなどをローマ教皇に贈った、所謂「ピピンの寄進」によってローマ教皇領を創設したことが考えられる。

彼はラン伯エルベールの娘、ベルトを妻に迎える。彼女には「大根足 Grosses jambes」ではなくて、「大足 Grans Piés」のあだ名が付けられている³⁹⁾。両足とも大きかったと片足のみが大きかったの2つの説がある。730年頃没した聖ヴィアンスの奇蹟譚には身体の部位が巨大化する病気 *enormitate membrorum* に苦しむ婦人の話が出てきている⁴⁰⁾。更に、このベルトは12世紀には彼女を題材にしたと思われる『大足のベルト』という物語が作られてもいる⁴¹⁾。主人公のベルトはハンガリー王の娘として登場し、ペパンと結婚するためにフランスに連れてこられるが、初夜の晩、召使いの策略によって、その召使いの娘と入れ換えられてしまう。森に連れ出されて殺されようとするが、森番に助けられ、9年以上もそこで暮らしたあと、奇蹟的にペパンによって見つけ出され、王妃として迎えられたというのが大筋である。そして、皮肉屋のヴィヨンがこの大足ベルトをジャンヌ・ダルクと共に美女の1人に数え上げている⁴²⁾のみならず、彼女の大足を平べったい足とする見方とガチョウの足との共通性⁴³⁾も加わって、一部の人々によって1695年出版のシャルル・ペローの散文による童話集『がちょうおばさんの話 Contes de Ma Mere Loye』のモデルになっているのみならず、イギリスの有名な童話『マザー・グース Mother Goose』の主人公を生むことになったと

39) ラテン語で書かれた作品で、ベルトにこのあだ名を付したものは確認されていない。詳細は後出註41) で上げられている作品などを参照。

40) *Miracula s. Vincentii*, AASS, Julii 3, p.680.

41) Adenet le Roi, *Berte as grans piés*, ed. A. Henry, Genève, 1982.

42) François Villon, *Oeuvres*, ed. A. Longnon/L.Foulet/A.Lanly, Paris, 1992, p.23 (『ヴィヨン詩集成』天沢退二郎訳 白水社 2000年 p.67, 283)

43) P.Ménard, *Berte au grant pié, Bietris, Alis ou le résurgence de la culture épique dans la Ballade des Dames au temps jadis*, *Romania*, 102, 1981, p.115.

考えられている⁴⁴⁾。

3. シャルルマーニュ (カール大帝) Charlemagne (在位768-814年)

Charlemagne は Charles (名前) と magne (「大きい」の意) の合成語である。中世フランス語で書かれた武勲詩『ロランの歌』の12世紀の写本には、はっきりと Charlemagne (Carlemagne, Karlemagne, Charles li magnés, Karles li magnés) として出てくる⁴⁵⁾。しかし、聖者文学作品では言及回数が他を圧しているシャルルに付されたこのあだ名はいつ頃、どのような経緯で出てきたのであろうか。

カール大帝伝記を残している、同帝の側近であったアインハルトと、同帝の孫や曾孫の代に活躍したノトカーはカールを1度も「カール大帝」とは呼んでいない。アインハルトはカールのローマにおける西ローマ皇帝の戴冠によって、皇帝 *Imperator* と尊厳者 *Augustus* の称号が送られたとは書いている⁴⁶⁾。アインハルトは古代の皇帝伝作家スエトニウスの文体に倣ったことは周知の事実で⁴⁷⁾、彼の作品では当時の広く知れわたった呼び名が正確に伝えられていないとの疑いを払拭することがきない。833年の史料⁴⁸⁾に *Karolus Magnus*、そして後述される、837年に書かれた彼の長子ルイの伝記⁴⁹⁾では「皇帝である偉大なカール *Imperator magnus Karolus*」の文言と確かに出会う。この伝記を公刊した作者の友人ストラボンによって付された序文の中にも「シャルルマーニュ

44) 『完訳 ペロー童話集』(新倉朗子訳 岩波書店 2006年) 264-6頁; *The New Encyclopaedia Britannica*, 15th ed. 1986, vol. 8, p.361.

45) Fr. Michel, *La chanson de Roland ou de Roncevaux du XII^e siècle*, Paris, 1837, p.15, 22, 36, 47, 55, 95 etc.

46) *MGH, SS*, 2, p.458.

47) A. Molionier, *Les sources de l'histoire de France*, I, p.199.

48) *MGH, SS* 15, p.380, 388.

49) *Ibid.*, 2, p.591

Karolum magnum」の表現を見ることが出来る⁵⁰⁾。シャルルマーニュの娘を母に持ち、ルイ敬虔王の息子たちの伝記を残しているニタール（844年頃没）はカールに「偉大な皇帝 magnus imperator」や「偉大な Magnus」の美称辞を付しているが、シャルルマーニュのラテン語のように、Magnus が名前の後に来ることはない⁵¹⁾。大帝の曾孫シャルル禿頭王が発給した845年の文書には「余の偉大な Magnus 祖父カール Carolus」と書かれている⁵²⁾。888年から891年にかけてアルヌール派のザクセン人聖職者によって書かれた伝記には Carolus Magnus が頻繁に使用されている⁵³⁾。

このような事情から判断して、「大帝」のあだ名は彼の存命中から使用されていたと考えられる。それでは、何を契機にそのようなあだ名が付けられたのであろうか。これに関しては周辺の諸部族を征服したとき、ローマ教皇による西ローマ皇帝の戴冠時、アラブ軍と戦うための遠征時の諸説が出されているが、1つに絞り込むには成功していない。

しかし、この言葉の第一義は身体の大きさ、つまり堂々とした体格であることを忘れてはならない。アインハルトはカールの容姿について次のように述べている。「彼の体はふとって、強健であった。背も高かったが、均斉を破るほどではなかった。というのも彼の身長は、彼の足の七倍もあったことは確かであるから。彼の頭頂は丸くふくらみ、両眼は人並みはずれて大きく生き生きと輝き、鼻は普通よりもやや大きめであった。白髪は美しく、顔は微笑みをたたえ機嫌よく見えた⁵⁴⁾と。「彼の足の七倍」とする説と「7フィート (= 2 m 7 cm)」とする説が

50) *Ibid.*, p.589.

51) Nithard, *Histoire des fils de Louis le Pieux*, ed./trad. Ph. Lauer, Paris, 1926, p.4, 120, 138, 144.

52) Devic et Vaissette, I, p.430, n° 81; et preuves, col. 88; *La chanson de Roland*, p.III.

53) *Annalium de gestis Caroli Magni libri V*, in *RHF*, 5, p.136, 137, passim.

54) *MGH*, SS, 2, p.455.

あるが、ここでは、昔の日本人が尺を使って表現していた如く、6倍（= 1 m78cm）以上で7倍以下とするのが妥当ではなかろうか。これからも、カールは大男であったと見る事が出来るのではなかろうか。

サン・トロン修道院長ティエリ（1107年没）に帰せられている『聖女アマルベルジュ伝』では、巨大な熊を槍の一撃で倒すと、居合わせた女性が群衆を前にして「おお、若くして、諸王の中で最も輝く子孫よ、汝は顔に威厳にみちた恭順さを漂わせ、腕において強く、すぐれた名前の称号を冠とし、未来永劫にわたってカロルス・マグヌスと称されるであろう」と書いたあと、それに続けて、作者は「この時からこの名前が始まり、そしてこの時から彼にそれが付いてまわり、以後その中で彼は見事に光彩を放った」⁵⁵⁾と書き記している。作品自体がかなり後代のものであり、編者のマビヨンもこの伝記を架空の話と見ていることからして、そのまま受け取ることはできないであろう。ドイツの作家がカロリング諸王のなかで唯一あだ名を付けて呼んでいる王は、シャルルマーニュただ1人である⁵⁶⁾。

このカールには妾の間に生ませた、父と同名のペパン Pépin le Bossu がいたが、アインハルトによると、彼は「顔は美しかったが、せむし gibbo deformis (=bossu) であった」⁵⁷⁾。このような表現になったのは、彼が792年に謀反を起こしたこととも関係しているであろう。

Magnus の美称辞をもつ人物は他にも沢山いる。メロヴィングの王に関しては上述したが、ローマ教皇の場合、大教皇と呼ばれている人がレオ1世（440-461年）、グレゴリウス1世（590-604年）、ニコラス1世（858-867年）である。

55) *Vita s. Amalbergae*, AASS, Julii 3, p.94. 《O ! juvenis, clarissima regum proles, reverentiam majestatis in vultu geris, in brachiis fortis, egregii praenominis titulo coronaberis, et Karolus Magnus in aeternis seculis cognominaberis. Quod agnomen ex tunc coepit, atque ex illo ei tempore haesit, in quoet postmodum magnifice claruit》

56) Cf. *Lamperti monachis Hersfeldensis opera*, p.14, 20, in *MGH, SS in usum scholarum* 38, Hannover, 1984.

57) *MGH, SS*, 2, p.454.

グレゴリウス1世に関しては、同時代の聖者伝から確認される⁵⁸⁾。この美称辞をもつ者は、表が示す如く、フランス以外の国王や諸侯の間にも見いだされる。しかし、彼らとカール大帝の違いは、後者の表現が帝国の各地で書かれた非常に多くの作品で長期にわたって見いだされることである⁵⁹⁾。それはカール大帝の偉大さは中世のヨーロッパで広く認められていたことを証明する以外のなにものでもない。また、マビオンは皇帝であった者に Magnus の語が付されていた場合、それはあだ名ではなくて美称辞であったと解釈している⁶⁰⁾。

4. ルイ敬虔王 Louis le Pieux (在位814-840年)

カール大帝はこのルイを王国の共同統治者としてとき、「皇帝 Imperator とアウグストゥス Augustus と呼ばれるように命じた」とアインハルトは書き記している⁶¹⁾。ここに「皇帝」の称号と「アウグストゥス」の美称辞との関係が明らかにされている。

ルイの時代はシャルルマーニュが残した帝国の統一が王族内の対立、異民族の侵攻、諸侯の離反によって危機に立たされた時代であった。トリーア司教テガヌスは837年頃書き上げた同王の伝記を「その年はいと敬虔なる皇帝ルイ Lodowici piissimi Imperatoris 陛下の統治の22年目であった。永遠に祝福されるお方が幸福に暮らす彼をこの世に長く止まらせてお守りくださり、定めなきこの世を後にしてからはご自身のすべての聖者たちの仲間を迎え入れることをお認めくださらんことを。アーメン。」⁶²⁾と結んでいる。そして、カール大帝伝を残したノトカー

58) AASS, Maji 5, p.254; Janv 1, p.52; AASS, OB, 6, p.236.

59) 決して網羅的な算出ではないが、カロリング諸王のなかでシャルルマーニュはフランク王国とイベリア半島で書かれた33編の聖者文学に登場しているのに対して、ルイ敬虔王は12編、シャルル禿頭王は11編、ルイ吃音王は4編、シャルル単純王は12編、ルイ海外王は1編、ルイ無為王は2編の聖者文学で言及されているに過ぎない。

60) Jean Mabillon, *De re diplomatica*, p.408 (拙訳, 594頁)

61) MGH, SS, 2, p.459.

62) MGH, SS, 2, p.603; RHF, 6, p.85.

はこの王のことを「敬虔王の異名をもち、敬神の念の篤きあなたの曾祖父」⁶³⁾とはっきりと明らかにしている。実際、ルイは嫡子でなかったため、修道院で教育された。王位に就くと、多くの修道院を改革する一方、対教皇政策を変更して教会領を守護し、教皇選挙への不介入を堅持した。宮廷では優秀な聖職者を顧問に迎え、822年にはアッティニで公開悔悛を行っている⁶⁴⁾。この王に関しては、「天文家」—作品のなかで天文学への関心を見せていることからこのように呼ばれている—のあだ名をもつ同時代人の手になる伝記も伝存する⁶⁵⁾。

ルイの後を長子ロテールが継ぐが、継承をめぐる2人の弟シャルルとルードヴィヒとの間に争いが起こり、843年のヴェルダン条約によって、シャルルマニュの帝国は3分割され、シャルルが今のフランス、ルードヴィヒが今のドイツを相続し、ロテールがそれら2つに挟まれた、地中海に達する細長い領域と皇帝位を確保することになる。そしてこの条約以後、ルードヴィヒがフランスの作品に登場する場合、「ドイツ王 Germanorum rex」の称号が付されるようになる⁶⁶⁾。

このルイ1世は長い間「敬虔 Pius」王として知られてきたのであるが、16、17世紀からこの王のあだ名が「敬虔王」から「温厚 le Débonnaire」王に変わり、修道士の教えに従う偏狭な信心家として描かれることが多くなってくる⁶⁷⁾。その

63) *MGH, SS*, 2, p.758-9. 9世紀中葉から12世紀にかけての多くの聖者文学で同王は「敬虔王」と呼ばれている。Cf. *AASS*, Maji 1, p.285; 2, p.183, p.92; Julii 5, p.292; 6, p.215; Sept 7, p.465; Oct 7, p.1019; *AASS, OR* 6, p.235; *MGH, SS*, 15, p.213; *PL* 137, p.804 etc.

64) この王の業績については、cf. P.Riché, *Les Carolingiens. Une famille qui fit l'Europe*, Paris, 1983, p.149-61.

65) *Vita Hludowici imperatoris*, *MGH, SS* 2, p.607-648. Cf. A.Molinier, *Les sources de l'histoire de France*, I, p.228-229.

66) *AASS*, Julii 6, p.220.

67) K.-F.Werner, *Les origines*, Paris, 1984, p.397; P.Riché, *Les Carolingiens*, p.149. アンリ3世(1574-1589年)はこのあだ名に関して、その言葉には「愚か者」の意味が含まれているので、このあだ名以上に同王を怒らせることはなからうとよく言っていたようである。Cf. *Grand dictionnaire universel du XIX^e siècle*, ed.P.Larousse, Paris, 1873, t. 10, p.720. 最近では、ルイ敬虔王の業績を再評価する動きが始まっている。

影響は今日まで続いているのであるが、その理由は余りにも偉大な父の後を継いだこと、その父の帝国を解体させる原因を作りだしたことなどの、同王の統治上の業績と関係していたと考えられる。

5. シャルル禿頭王 Charles le Chauve (在位843-877年)

一般的に言って、身体的特徴を示すあだ名は、実際に見た人によってのみ発せられる言葉であって、後世の人々によって付けられるものではない。このあだ名も例外ではないが、少し説明が必要であろう。

禿頭には先天的なものと後天的なものの2種類がある。前者の場合、通常 *glaber* の語が使用され、この語をあだ名にもつ有名な人物としては11世紀に活躍し、『歴史5巻』を著したラウル・グラベル Raoul Glaber がまず思い出される⁶⁸⁾。これに対して、あだ名としてこの王に付けられた *calvus* は加齢によって生じた禿頭を指すために使用される。伝存する同王の印章に刻まれた肖像に関する限り、禿頭は確認されない⁶⁹⁾ が、ミュンヘン国立図書館所蔵の『黄金写本』に収められた装飾画では確かに頭頂部が禿げている⁷⁰⁾。しかし、亡くなる年の5月に、コンピエーニュのサン・コルネイユ修道院の前身であるサント・マリア参事会聖堂の献堂式で教会への従順を表すために、フランクの慣習である長髪の国王に反して、頭髪を剃らせたと言主張する研究者もいる⁷¹⁾。このように、禿頭の原因

68) *glaber* は頭に毛髪が一本もない状態を意味する。Cf. *Le Grand Gaffiot*, 2000, Paris, p.720.

69) J. Mabillon, *De re diplomatica*, 407, 409 (拙訳, p.591, 595); Ch.-F. Toustain et R.-P. Tassin, *Nouveau traité de diplomatique*, 6 vol., Paris, 1750-1765, t. 4, p.116-118.

70) M.Mourre, *Dictionnaire encyclopedique d'histoire*, Nouvelle édition, Paris, 1978, p.897.

71) [http://fr.wikipedia.org/wiki/Charles le Chauve](http://fr.wikipedia.org/wiki/Charles_le_Chauve). 877年5月に同王がコンピエーニュに来て、献堂式に出席したことを示す証書が伝存するが、そこに剃髪への言及はない。Cf. *Cartulaire de l'abbaye de Saint-Corneille de Compiègne*, 2 vol., ed. Le chanoine Morel, Montdidier, 1904-1909, p.VII et charte n° 1. また, P.ザントールは「禿頭」は同時代人によって付けられたあだ名であると言っているが、史

因は特定されていないが、シャルルの頭が禿げていたと考えて間違はなからう⁷²⁾。

聖者文学でシャルルが「禿頭王」と初めて呼ばれているのは10世紀末ないし11世紀初頭の作品⁷³⁾であるが、同王がコンピエーニュに建てさせた宮殿が、11世紀の国王伝記作家によって「シャルル禿頭王の館 domus Karoli Calvi」と呼ばれている⁷⁴⁾。フランスではシャルルと名乗る国王は沢山いたので、実際にこのように呼ばれていたと考えられる。そしてその開始も次王の代まで遡らせることが可能となる。また、聖ヴィヴァン伝では「若王 Junior」として出てきている⁷⁵⁾が、それは祖父のシャルルマーニュと区別するためであったし、祖父と同様に、Magnus が付される場合もあるが、これはあだ名よりも皇帝につきものの美称辞と考えられる。さらに、このシャルル禿頭王はシャルル3世とも呼ばれている⁷⁶⁾。このような家系の継承が強く意識された表現はメロヴィング時代では確認されないのに対して、カロリング時代では非常に早くから確認されることになる。資料が整備されていたこと、人々の間で記憶が継承されることを望んだことなどが挙げられる。

料の挙示はない。P. Zumthor, *Charles le Chauve, le petit-fils de Charlemagne*, Paris, 1981, p.8.

72) サン・タマン修道院の修道士ユックバル (c.850-930年) は禿頭を弁護する滑稽な詩 *Ecloga de calvis* を残している。マインツ大司教ハット (在位891-913年) に献呈されたこの作品のなかに、シャルル禿頭王との関係を明示するものはどこにもない。しかし、この王の聖書がこの修道院で制作され、ユックバルは彼に献呈した作品を数編残しており、更に禿頭が詩のテーマにまでなっていることなどを考え併せると、シャルル禿頭王からインスピレーションを得たと考えて大過ないのではなからうか。Cf. *Dictionnaire d'histoire et de géographie ecclésiastiques*, Paris, 1912-, vol. 25, col.40-44; P.Zumthor, *Charles le Chauve*, p.251-3; 岡地稔「ピピンはいつから短軀王と呼ばれたか：ヨーロッパ中世における「渾名文化」の始まり—プリュム修道院所領明細帳カエサリウス写本・挿画の構想年代について—」(『アカデミア』人文・社会科学編 84 2007年) 197-261頁。

73) *Translatio et miracula s. Genulfi*, AASS, OB, 6, p.237; AASS.o.s.B., III, 1, p.299. Cf. N.Huyghebaert, Un moine hagiographe: Drogon de Bergues, *Sacris erudire*, 20, 1971, p.212

74) Helgaud de Fleury, *Vie de Robert le Pieux*, p.62-63.

75) AASS, Jan 1, p.813.

76) AASS, OB, 4, p.326.

6. ルイ吃音王 Louis le Bègue (在位877-879年)

シャルルを継いだルイ 2 世は吃ることから公衆の面前で話すのが苦手で、そのことが彼の権威を大いに損ねていた⁷⁷⁾。9 世紀末に書かれた聖者伝のなかで、すでに「吃音王 Balbus」と呼ばれている⁷⁸⁾。他方、10 世紀後半に活躍したモンティエ・ラン・デル修道院長アドソン (992 年年没) が初代院長ベルシャルの古い伝記を改編したものの中に、「過度の愚行によって無為王 Nihil-faciens と呼ばれている」⁷⁹⁾ とある。しかし、その後の作品では専ら「吃音王」と呼ばれている⁸⁰⁾。さらに、13 世紀の国王伝記作家は彼を「白色王 Albus」と呼んでいる⁸¹⁾。第 1 と第 2 のあだ名の関連性は容易に想像できるが、最後のあだ名の由来については定かでない。

7. シャルル (3 世) 単純王 Charles le Simple (在位893-922年)

879 年、ルイ吃音王の 3 男として生まれる。異母兄 2 人、シャルル 2 世 (879-882 年) とカルロマン (879-884 年) に続いて 893 年に国王に推戴される。上記のアドソンは父王のあだ名の由来に進む前に、このシャルルに関して、「彼はすべてにおいて父王の統治を継承し、無知よりも政治と軍事の全般で見せた無気力から単純王と呼ばれていた」⁸²⁾ と記している。そして一部の作家においてはさらに進んで、ヴァンドーム編年記では「この年 (893 年) ルイの息子シャルルがランスで国王となった。彼は愚か者 follus で、その後ロベールによって王権から排除された」、別の年代記でも「無為王ルイの息子、シャルル愚王が統治していた

77) Cf. http://fr.wikipedia.org/wiki/Louis_II_de_France

78) AASS, Marti 2, .510.

79) AASS, OR, 2, p.811.

80) AASS, Sept 6, p.704; Adémar de Chabannes, *Chronique*, p.197.

81) *Oeuvres de Rigord et de Guillaume le Breton*, I, p.174.

82) AASS, OR, 2, p.811.

とき」⁸³⁾と記している。これ以外にも、「愚王 Insiens」や「Minor」のあだ名を付した作家も見いだされる⁸⁴⁾が、後者に関しては「小王 Minor」は「若王 Junior」と同様に、同名の前王との関係からそのように付けられたと考えられる。

シャルル3世は898年のノルマンディ割譲によってノルマンの脅威を何とか排除したが、強力な諸侯勢力の反対になす術もなく、晩年は王位を剥奪され、6年の捕虜の身のまま死を迎えねばならなかった⁸⁵⁾。他方、後述される如く、この王の治世より、次の王朝を開くことになるロベール家の勢力が、3人の王を出すことによって、フランスにおける実質的な支配者への道を実確にしていくことになる。他方、この時代、プロヴァンス王(887-928年)で短期間ではあるが西ローマ皇帝位にもついたことのあるルイ3世が盲目王 l'Aveugle と呼ばれているが、それはイタリア王位をめぐる対立するフリウリのベレンガリオに捕らえられ、両眼をえぐり取られたことからそのように呼ばれるようになった⁸⁶⁾。

8. ルイ海外王 Louis d'Outremer (在位936-954年)

シャルル単純王とイングランドのエドワード長兄王の娘イードギフ Eadgifu との間に生まれたルイ4世は2歳のときに父が貴族たちによって廃位させられ、3歳のとき、父が捕虜となったのを機に母親に連れられてイングランドに避難す

83) 《Hic (=Karolus Simplex) fuit follus, qui postea a Roberto de regno dejectus est》, in *Chroniques des églises d'Anjou*, ed. P. Marchegay et E. Mabilley, Paris, 1869, p.161. 近くのサン・フロラン修道院の編年記でも「ルイの息子、シャルル愚王 Karolus Stultus, filius Ludovici」とある。Cf. *ibid.*, p.185. 《Regnante Karolo Stulto, filio Lodovici Qui Nihil Fecit》, in *Chroniques d'Anjou*, p.31.

84) 《Carolus, cognomento Insiens vel Minor》, in Adémar de Chabannes, *Chronique*, p.138 (III, 20); 《Karolus Follus a suis relinquitur》, in *Chroniques des églises d'Anjou*, p.185.

85) P. Riché, *Les Carolingiens*, Paris, 1983, p.236-42.

86) http://fr.wikipedia.org/wiki/Louis_III_l'Aveugle.

る。その間王冠はブルゴーニュ公ラウル（在位923-936年）の頭上に輝いていたが、男系子孫を残さず亡くなると、ルイ4世が呼び戻された。このようなイングランド滞在から、この「海外王」というあだ名が付けられたのである⁸⁷⁾。11世紀の史料に初出するそのあだ名には *Ultramarinus* または *Transmarinus* の2語が当てられている⁸⁸⁾ が、意味は同じである。954年落馬が原因でランスにて死去している。ルイの後をロテール Lothaire 3世（954-986年）が継ぐが、弟のシャルルは国王の息子として相続地を持たない初例となった。

同じ頃、東のドイツではオットー1世（936-973年）が即位し、962年には神聖ローマ皇帝に推戴される。カール大帝と同様に、「大帝 *Magnus*」が付されて現れるが、その範囲は非常に限定されていたようである。帝国の北西端のトゥール Toul で11世紀以降に書かれた聖者伝では「ローマ人の尊厳者、オットー大帝 *Magnus Otto Romanorum Augustus*」⁸⁹⁾ とある。フランスでもその名声は知られていたがその範囲は限定されていて、帝国の西側に隣接する、南フランスのクリュニ Cluny で書かれた作品では「オットー大帝 *Magnus Otto*」⁹⁰⁾ とあるに過ぎない。ここがカール大帝のヨーロッパ的規模での名声との大きな違いである。

9. ルイ無為王 Louis le Fénéant（在位986-987年）

父ロテールはロベール家の大ユグとその息子ユグ・カペとの対立のなか、ノルマンディ公との戦闘やロレーヌ遠征によって王権の強化を企てるがすべて不成功に終わる。彼はルイ5世を残すが、その息子は「無為王」と呼ばれ、カロリング王朝最後の王を象徴するあだ名となっている。無為はその通り、「何もしなかつ

87) P.Riche, *Les Carolingiens*, p.245 sqq.

88) AASS, OB, 7, p.228. サン・フロラン修道院の編年記では両語が使用されている。

Cf. *Chroniques des églises d'Anjou*, p.186.

89) PL, 137, col. 763.

90) *Vita s. Gerardi*, AASS, Apr 3, p.208, 209.

た Nihil fecisse」ことを意味している。11世紀初頭の作家エモワンはあだ名「無為王」の由来について在位2年弱の間注目すべきことは「何も nil」していなかったためか、シェル女子修道院から^{さら}浚ってきた修道女を愛人にしていたことで、「取るに足らない nihil」罪を犯したための、2つの説を紹介している⁹¹⁾。

ルイは17歳で父王ロテール3世の共同統治者に推戴されるが、王としての統治は1年と2月と非常に短かった。彼が結婚させられた相手も再々婚になる、20歳も年上のアンジュ伯の娘アデライドで、その結婚も2年しか続かなかった。さらに、毒殺された父王を継いだ彼を待っていたのは宮廷内の陰謀、東からのドイツ諸王の執拗な干渉、新王朝を開くことになるユグ・カペなどの聖俗諸侯の不穏な動きであった。結局、短い統治のあと、ユグ・カペが所有するキュイズの森での狩猟中に事故にあって落命する⁹²⁾。登位時の困難な状況や1年強の在位を考えると、彼に下されたこのような評価は少し酷すぎるのではなかろうか。最近では、この王の能力を高く評価し、このあだ名の不当性を強く訴える研究者もでてきている⁹³⁾。

ルイは存命中からこのあだ名で呼ばれていたとは考えにくい。メロヴィング王朝末期、カロリング王朝を開くことになる実質的支配者の宮宰の前で無力をさらけ出すだけであった諸王⁹⁴⁾の姿と重なったために、カペ王朝に生きた作家たちが自分たちの王朝を称揚する手段の1つとしてこのあだ名を多用したのではなかろうか⁹⁵⁾。

91) *Miracles de saint Benoit*, p.93.この王以外にも、2人の王にこのあだ名が付けられている。Cf. U.Chevalier, *Répertoire des sources historiques du Moyen Age. Bio-Bibliographie*, 2 vol., New York, 1960, col. 3454, 4023.

92) F.Lot, *Les derniers Carolingiens*, p.186-197.

93) G.Bordonove, *Les rois qui ont fait la France*, Paris, 1986, p.169.

94) Eginhard, *Vie de Charlemagne*, ed./trad. L.Halphen, Paris, 1923, p.8; Du Cange, *Glossarium mediae et infinae latinitatis*, 5, p.592.

95) このあだ名をもつ王は意外と多く、フィレンツェの支配者であるメディチ家のロレンツォ(1449-1492年)の息子ピエーロ(Piero the Fatuous)がこのようにあだ名されていた。Cf. *Encyclopaedia Britannica*, vol.7, p.1005.

II. カペ王朝

カペ王家の起源はライン川沿岸からフランスに来ていた強者ロベール Robert le Fort (815頃-866年) に遡る。彼は、シャルル禿頭王治下、ネウストリア侯としてとくにノルマン人とブルトン人との戦いで手柄をたてる。その結果、彼の2人の息子ウード (888-898年) とロベール1世 (923-936年)、そして后者の娘婿で、ブルゴーニュ公領の創設者の息子ラウル (923-936年) が、カロリング王朝のもとでありながら、王位に就いた⁹⁶⁾。さらに、ロベール1世の息子でフランク人の公であった大ユグ Hugues le Grand (897-956年)、つまり次のユグ・カペの祖父は『ロベール敬虔王』の中で「その敬虔さ、善良さ、強さから大ユグと呼ばれた」⁹⁷⁾ とあるごとく、国王になることはなかったが、10世紀に書かれた聖者伝ですでに「大ユグ」と呼ばれていて⁹⁸⁾、ルイ4世とロテール3世の両王治下で実質的に王国を統治していた。そして、カロリング朝最後の王ルイ5世の死後、王になって新王朝を開いたのが次のユグ・カペであった。

1. ユグ・カペ Hugues Capet (在位987-996年)

家名のカペ (Capet。ラテン語では Cappatus) は代々院長を務めていたトゥールのサン・マルタン修道院の守護聖人の袖無しマント cappa を所有している人に由来すると言われている⁹⁹⁾。この家名は世襲名ではなくて、このユグの代に初

96) J.Dhondt, *Etudes sur la naissance des principautés territoriales en France (IX^e-X^e siècle)*, Brugge, 1948, p.93 sqq.

97) *Vie de Robert le Pieux*, p.80.

98) AASS, Julii 2, p.56; Apr 3, p.462; Junii 4, p.113; Sept 6, p.704; AASS, OB 6, p.244; 7, p.228. これ以外にも、彼は顔の青白さから「蒼白 Albus」や、幾つかの修道院長を兼ねていたことから「修道院長 Abbas」とも呼ばれていた。Cf. E. Pérard, *Recueil de plusieurs pièces curieuses servant à l'histoire de Bourgogne*, Paris, 1654, p.125.

99) *Liber de compositione castri Ambaziae*では Chapeth と綴られている。Cf. *Chroniques d'Anjou*, ed. P.Marchegay et A.Salmon, Paris, 1856, p.32. このあだ名の由来については、cf. F.Lot, *Origine et signification du surnom de «Capet»*, in Id., *Les derniers carolingiens*, Paris, 1891, p.320-322.

めて使用されたものに過ぎない。13世紀の国王伝記作家はフランスの諸侯は国王にブルゴーニュ公で、大ユグの息子で、カペ (Capet) とあだ名されたユグを選んだと言っている¹⁰⁰⁾。これに対して、アデマール・ド・シャバンヌはこのユグではなくて彼の父にこのあだ名を付し、その理由を俗人修道院長として多くの修道院を有していて、院長の格好をしていたのでと説明している¹⁰¹⁾。さらに、このユグに、父と同様の「大ユグ」のあだ名を付している作家も見いだされる¹⁰²⁾。

2. ロベール (2世) 敬虔王 Robert le Pieux (在位996-1031年)

ランスにおいて、後の教皇シルヴェステル2世の生徒として最高の教育を受け、聖書や神学に強い関心を持ち、フランスで異端討伐を最初に実行した国王としても知られている。しかし、私生活においては3度も政略結婚を重ね、その内の1つでは教皇グレゴリウス5世によって聖務停止が宣告されている¹⁰³⁾。

伝記が同王の礼拝堂付き司祭で、フルリー修道院の修道士エルゴによって書かれているのであるが、その表題にこのあだ名が使用されている¹⁰⁴⁾。それによると、彼の容姿に関しては、背は高く、直毛の髪はきれいに整えられて、眼差しは控え目で、大きな鼻は真っ直ぐ伸び、甘くて優美な口は聖なる平安の接吻に、頬と顎の髭はほどほどで、肩はいかっいて、王冠を被った姿は血筋のよさを感じさ

100) *Oeuvres de Rigord et de Guillaume le Breton*, t.1, p.61.

101) Adémar de Chabannes, *Chronique*, trad. Y. Chavin et G. Pon, Turnhout, 2003, p.225, note 212. このあだ名は前王朝のシャルル単純王にも付されている。Cf. *Chroniques des églises d'Anjou*, p.185.

102) Ordericus Vitalis, *Historiae ecclesiasticae libri tredecim*, 5 vol., ed. A. Le Prevost, Paris, 1838-1855, t.3, p.104. 《Defuncto Hugone Magno, filius ejus Hugo Magnus in ducatu successit》しかし編者は Hugues Capet が Hugue le Grand と呼ばれることはなかったと反論する。Cf. A. Luchaire, *Les premiers Capétiens*, Paris, 1901, p.144.

103) C. Pfister, *Études sur le règne de Robert le Pieux (996-1031)*, Paris, 1885, p.1-69.

104) Helgaud de Fleury, *Vie de Robert le Pieux*, ed/trad. R.-H. Bautier, Paris, 1965.

せる素晴らしいものであった¹⁰⁵⁾とある。さらに、伝記では彼の篤い信仰心が随所で強調されていて、例えば、復活祭の日に12名による国王暗殺の計画が発覚したが、数日拘束したあと、復活の日にイエス・キリストの体と血に与らせ、「敬虔にして慎重、博識にして賢明なる、神の第一人者（＝国王）は聖性に満ちたお言葉で」、2度としないことを誓わせて放免した¹⁰⁶⁾とある。また、パリの宮殿の改築を祝うために、同じく復活祭の日に祝宴が開かれたとき、大勢の貧者にまぎれ込んでいた1人の盲人が国王に水を自分の顔に振りかけてくれるようお願い出た。国王が快諾してそうすると、奇蹟によって盲人の目が見えるようになった¹⁰⁷⁾とのことである。

この伝記には弱体王権を国王の聖性によって補強しようとの意図が感じられるとする研究者もいる¹⁰⁸⁾が、同時代人のオルレアン司教聖ティエリの伝記では「信仰に篤く学問に秀でた王」¹⁰⁹⁾として称讃されているし、オルレアンの第4代司教、聖エニヤンの奇蹟譚においても、同王のこの聖者への深い崇敬の気持ちが活写されている¹¹⁰⁾。従って、教皇庁との対立はあったかもしれないが、王ロベールの信仰心は彼の存命中から民衆に知れわたっていたと推測される。

3. アンリ 1 世（在位1031-1060年）

ロベール 2 世の長男ユグは共同統治の 6 年目に急死したため、双子の弟でブルゴーニュ公のアンリ 1 世が代わって共同統治者となった。通常、この王があだ名

105) *Ibid.*, p.58.

106) *Ibid.*, p.62-63.

107) *Ibid.*, p.76.

108) Cl. Carrozzì, *La vie du roi Robert par Helgaud de Fleury: historiographie et hagiographie*, in *Annales de Bretagne*, 87 (1980), p.219-235; J.-Fr. Lemarignier, *Autour de la royauté française du IX^e siècle*, in *Bibliothèque de l'École des chartes*, 113 (1955), p.15-36.

109) *Vita s.Theodorici*, AASS, Janv 2, p.790.

110) *Miracula s. Aniani*, *Anal Boll.*, 94, p.263-4.

をともなって現れることはないが、12世紀の奇蹟譚が一度だけ彼のあだ名に言及している。彼に付けられたあだ名は *Municeps* で、辞書では「城主」または「城守備隊」の意とあるが、ここではその由来については戦闘の技術において並ぶ者はいず、とくに城攻めで負けたことがなかった¹¹¹⁾ とある。

4. ルイ (6世) 肥満王 *Louis le Gros* (在位1108-1137年)

アンリ 1 世を継いだのは大食漢、不品行、貪欲と評判が悪かったフィリップ 1 世 (在位1060-1108年) であるが、彼があだ名を伴ってあらわれることはない¹¹²⁾。

ルイ 6 世の治世からカペ王朝は「王権の覚醒期」に入る。国王はパリ地方の支配者からフランスの支配者としての自覚を持つようになる¹¹³⁾。彼は27歳で王位についたが、別のあだ名「戦闘者」または「強力王 *fortissimus*」が示すように¹¹⁴⁾、戦いの連続であった。同王および次王ルイ 7 世を強力に支援したのが、両王の摂政を務めたサン・ドゥニ修道院長シュジェールであった。シュジェールは両王の伝記を残しているのであるが、父王の伝記の最も古い版の1つで表題に「肥満王 *Grossus*」の文字がすでに使用されている¹¹⁵⁾。しかし、ルイは若いときから肥えていたのではなかった。作者は「汝らは、この若者が極めて急速に、あ

111) *Miracles de saint Benoît*, p.240. 《nulli priorum secundus in officiis militaribus,maxime cum ob invincibilem expugnationem quarumque munitionoum,non a captione munerum, Municeps ab omnibus sit agnominatus》しかし、編者はこの王にこのあだ名がつけられたのは初めてだと言っている。

112) R. Fawtier, *Les Capétiens et la France*, Paris, 1942, p.21. シュジェールは同王の肉欲を強く非難している。Cf. Suger, *Oeuvres complètes*, ed. A.Lecoy de la Marche, Paris, 1867, p.46.

113) 柴田他編著『フランス史』1巻 (山川出版社 2005年), 192-207頁参照。

114) *Miracula s. Genovefae*, AASS, Jan 1, p.151.

115) Suger, *Oeuvres complètes*, p.5. 邦訳としては、森洋訳『サン・ドニ修道院長シュジェール』(中央公論美術出版 2002年)があり、訳はここからの借用である。*Liber de compositione castris Ambaziae*では同じ意味の *Pinguis* の語が使用されている。Cf. *Chroniques d'Anjou*, ed. P. Marchegay et A. Salmon, Paris, 1856, p.32.

るいはベリイの、あるいはオーヴェルニュの、あるいはブルゴーニュの境界地域を、騎士隊を率いて飛びまわるのを見たことであろう」¹¹⁶⁾と、勇敢な戦士としての姿を随所で描写している。しかし、40代後半に入って、明らかな変化が現れ始める。オーヴェルニュ伯がクレルモン司教に振るった暴力を止めさせるために、オーヴェルニュ遠征を断行した話のなかで「すでに王の身体は重くなり、肉は重量のある分厚い塊となっていた。他の何者であろうと、さらに貧民であろうと、このような身体の危険な不都合さをもって馬に乗ることを、欲しもせず出来もしなかった」とか「王はいつも、沼沢地の困難な徒渉に際しては、その部下たちの最強の腕によって支えられねばならなかった」¹¹⁷⁾とあり、肥満が相当に進んでいたと想像される。それから8年後、マルル城主トマを討伐した話のなかでは「王はこのように言い、驚くべき勇気をもって、体は重かったが、峻険な場所や森林に閉ざされた道を、危険はあったが、軍とともに辿り、城の近くへ達した」¹¹⁸⁾と、反抗する封臣たちとの戦いが肥満との戦いと併行して進められていた。そして、終章に近づくにつれ、「すでにしてルイ王陛下は、身体の重みに圧倒され、仕事の継続的な骨折りに些か意気阻喪していたが」、「かりに肥った身体という軛という厄介事に抵抗しなかったとしても、すべての敵を広く一般に凌駕して粉碎していた」、「しかし、王はこの身体の重さに弱り果て、ついに寢床でまったく動けなくなった」¹¹⁹⁾と、肥満は極限に達していた。

116) Suger, *Oeuvres complètes*, p.11. 《Videres juvenem celerrimummodo Bituricensium, modo Arvernorum, modo Burgundionum militari manu transvolare fines》

117) *Ibid.*, p.123-4. 《Jamque gravis corpore et carnae spissitudinis mole ponderosus, cum alius quislibet, pauper etiam, tanta corporis periculosi incomoditate equitare nec vellet nec posset》; 《cum saepius eum angustii paludum, locis fortissimis, suorum lacertis sustentari oporteret》

118) *Ibid.*, p.132. 《Haec ait, et mira animositate, licet corpore gravis, per abrupta et nemoribus obstrusas vias, licet periculose, cum exercitu penetrans, cum prope castrum pervenisset》

119) *Ibid.*, p.140. 《Jamjamque dominus rex Ludovicus, et corporeae gravitatis mole et laborum continuato sudore aliquantisper fractus》; 《Ea tamen

次王ルイ7世の同時代人で、パリで長い間勉強した経験をもつオクスフォードの助祭長ウォルター・マップの書にも常に「ルイ肥満王」または単に「肥満王」として出てきている¹²⁰⁾。フィリップ美男王の伝記作家ギヨーム・ル・ブルトンもルイ肥満王ではなくて、肥満王としか呼んでいない¹²¹⁾。『コンポステッラ巡礼案内』では「異常に肥えた王」として出てくる¹²²⁾。ルイは57歳で他界するが、「肥満王」がもう1つのあだ名「戦闘者」を打ち負かしてしまったことになるのだろうか。

6. ルイ (7世) 若王 Louis le June (在位1137-1180年)

ルイ6世はアデライドとの間に「善良王 le Bon」とあだ名される長男フィリップをもうけ共同統治者に任命するが、25歳のときに、パリの郊外で騎乗していた馬が走ってきた豚と衝突して落命した¹²³⁾とある。従って、ルイ7世はルイ6世の次男であったことになるが、この王に関しても上記シュジェールは未完ではあるが伝記を残している¹²⁴⁾。そこに父王の場合と異なって、「若王」のあだ名を見ることはないが、アンジユの年代記や1140年の出来事に関する話を集めたモオ司教ファロンの奇蹟譚では確かにそのように呼ばれている¹²⁵⁾。12世紀中葉に書かれたトリーア大司教アルベロン伝でのハインリヒ3世と4世親子¹²⁶⁾の如く、中

corporis debilitatus gravitae, etiam lecto rigidissimus》

120) Walter Map, *De nugis curialium* (*Courtiers' Trifles*), ed./transl. M.R. James, Oxford, 1983, p.174, 436, 440, 456 etc.

121) *Oeuvres de Rigord et de Guillaume le Breton*, 3 vol., Paris, 1882, t. 2, p.155.

122) *Le guide du pèlerin de Saint-Jacques de Compostelle*, ed./trad. J. Vielliard, Mâcon, 1963, p.118.

123) *Oeuvres de Rigord et de Guillaume le Breton*, t.1, p.63; Suger, *Oeuvres complètes*, p.138. 詳しくは, cf. W.Map, *De nugis curialium*, p.457.

124) *Historia gloriosi regis Ludovici VII, filii Ludovici Grossi*, in *RHF*, 12, p.124-133.

125) *Chroniques d'Anjou*, ed. P. Marchegay et A. Salmon, Paris, 1856, p.33; *Relatio miraculorum sancti Faronis*, *AASS*, Oct. 12, p.616; *RHF*, 18, p.635でもそのあだ名が付けられている。

126) *MGH, SS*, 8, p.243-4.

世を通じて、senior と junior は同名の父子を区別するためによく使われており、ここでも父親である「老王」と区別するために「若王」が使用されたと考えられる。この王の同時代人であった、前出のウォルター・マップの『宮廷の些事について』のなかでこの王の逸話が紹介されているが、その一部は彼自身が見たり聞いたりしたことであった。そこで作者はルイ7世には「殊のほかキリスト教的で温和な王」¹²⁷⁾ と非常に好意的で、その人物評価が以後イングランドでは定着することになる¹²⁸⁾。後述される、次王フィリップ尊厳王の伝記作家リゴールも十字軍に参加したこの王を「聖王 piissimus」と呼んでいる¹²⁹⁾。どうして若王という通俗的なあだ名が宗教心と結びついたあだ名を押しつけてしまったのであろうか¹³⁰⁾。

7. フィリップ（2世）尊厳王 Philippe Auguste（在位1180-1223年）

「尊厳者 Augustus」は、既述の如く、皇帝の称号と結びついていた美称辞とされてきた。しかし、このフィリップが皇帝に戴冠された事実はない。どのようにしてこのあだ名が付けられたのであろうか。

彼が登位したとき、フランスの半分は結婚や相続権によってイングランド王の支配下に入っていたのに加え、北部ではフランドル伯が勢力を拡大し、東からはドイツ皇帝が王国の分割を狙っていた¹³¹⁾。このような状況に終止符を打ったのが1214年のブーヴィーヌの戦いで、フィリップの軍隊はフランドル伯・ドイツ王・イングランド王の連合軍を撃破したのである¹³²⁾。これはイギリスの勢力が大陸

127) Walter Map, *De nugis curialium*, p.406, 442, 444.

128) *Ibid.*, p.442-443, note 3.

129) *Oeuvres de Rigord et de Guillaume le Breton*, t.1, p.7.

130) 因みに、イングランド王のなかでは、ヘンリ6世（在位1422-71年）が同様に若王（Henricus Juvenis）と呼ばれている。Cf. Thomas Basin, *Histoire de Charles VII*, 2 vol., ed./ trad. Ch.Samaran, Paris, 1964, I, p.172.

131) R.Fawtier, *Les Capétiens et la France*, p.144-5.

132) ブーヴィーヌの戦いに関しては、Cf. G.Duby, *Le Dimanche de Bouvines*, 27

から排除され、東からの脅威はなくなり、フランスの王権がその威力を内外に示した象徴的な出来事であった。

カペ王家は王位篡奪の印象を打ち消すためと、東に現れた神聖ローマ皇帝との関係から、カロリング王家との血縁関係が不可欠と考えられていた¹³³⁾。その試みはロベール2世の治世から確認されるが、離婚によって失敗する。しかし、ルイ7世の再々婚の相手アデルはカロリング王家と繋がるシャンパーニュ伯家の出身で、両者のあいだに生まれたのがこのフィリップである。同王の伝記のなかで、前出のギヨーム・ル・ブルトンは同王をシャルルマーニュの末裔という意味で何回も「カロリド Karolide」と呼んでいる¹³⁴⁾。そして、フィリップ尊厳王の息子の1人、ピエールに Charlot のあだ名がつけられている¹³⁵⁾。そしてこのフィリップがシャルルマーニュの血が流れるエノー伯家のイザベラと結婚することによって、父方と母方からカロリング王家の血を引くルイ8世が生まれ、フランス王国年代記は彼を「皇帝でフランス王であった偉大なシャルルマーニュの血を引く」王と称讃している¹³⁶⁾。こうして、シャルルマーニュに繋がることが強調され、皇帝に付されていた美称辞「尊厳者」との関係が自然と浮上してくることになる。

パリのサン・ドゥニ修道院の修道士であったリゴール (c.1150-c.1209) はこの王の伝記を残しているのであるが、彼も「尊厳王」の文字を称讃のために頻繁に使用している¹³⁷⁾。その執筆は同王の存命中であり、存命中から「尊厳王」があ

juillet 1214, Paris, 1973 (『ヴーヴィーニュの戦い』(松村剛訳 平凡社 1992年))

133) R.Fawtier, *Les Capétiens et la France*, p.56-58.

134) *Oeuvres de Rigord et de la Guillaume le Breton*, t. 2, p.3, 58, 81, 115, 118, 285.

135) *Ibid.*, t.2, p.4,383.

136) *Les grandes chroniques de France*, 10 vol, ed. J.Viard, Paris, 1920-1930, t.7, p.3; *Gesta Ludovici VIII*, *RHF*, 17, p.302.

137) *Oeuvres de Rigord et de la Guillaume le Breton*, t.1, p.1, 3, 4, 6, 7, 12, 16 etc. このあだ名は *RHF*, 18, p.243でも使用されている。

だ名として使用されていた可能性を示している。しかし、彼はその序文で、上述されたこととは異なったこのあだ名の由来を提示している。つまり、尊厳者 Augustus は「拡大する」「増大させる」を意味する動詞 *augero* の派生語で、王国を拡大したこと、王国の収入を増大させたこと、そして誕生日が 8 月 Augustus であったため¹³⁸⁾と。また、彼は 1 度だけであるが、同王に聖者によく付されていた、「神からの授かりもの *a Deo datus; Dieudonné*」のあだ名が与えてもいる¹³⁹⁾。他方、上記リゴールの作品を参考にし、その続編を執筆した同国王の司祭で修史官であったギヨーム・ル・ブルトン (c.1165-1226年) は 2 つの作品で共通してこのフィリップのことを「フィリップ高邁王 *Magnanimus*」としか呼んでいない¹⁴⁰⁾。そして、このあだ名は 13 世紀中葉に執筆されたトロワ・フォンテーヌの修道士オブリの年代記でも踏襲されている¹⁴¹⁾。

以上、フィリップは存命中から「尊厳王」と呼ばれていたことは確認できたし、1179年パリで起きたとされる聖リシャールの殉教を記した書でもそのように出てくる¹⁴²⁾が、その由来については絞り込めなかった。以上のあだ名以外にも、この王はゴネス Gonesse 城で生まれたことから、「ゴネスのフィリップ」と呼ばれることもあった¹⁴³⁾。

138) *Oeuvres de Rigord et de Guillaume le Breton*, t. 1, p.6. 1314年で終わっている国王事績録の作者は「フィリップ尊厳王は実に聡明にして勤勉な男で、自分の王国を数倍も大きくした」と、国王の功績の中で領土拡大を最も高く評価している。Cf. *Abbreviationes gestorum Franciae regum*, in *RHF*, 17, p.432.

139) *Ibid.*, p.7; *RHF*, 18, p.242.

140) *Oeuvres de Rigord et de Guillaume le Breton*, t.1, p.168, 249 etc; 2, p.1.

141) *RHF*, 18, p.746.

142) *Passion s. Richardis martyris*, AASS, Mars 3, p.590.

143) L.Delisle, *Fragments de l'histoire de Gonesse*, *Bibliothèque de l'École des chartes*, 1859, p.151. G.デュビイは 14 世紀に入ると、専ら「征服王」の名で称讃されるようになるというのに対して、J.ル・ゴフは「尊厳王」は 14 世紀以降に広まったもので、それまでは「征服王」のあだ名が広く知られていたと、異なる見解を示している。しかし、両者とも、史料の明示はどこにもない。Cf. G.Duby, *Le dimanche de Bouvines*, p.216; J.Le Goff, *Saint Louis*, Paris, 1966, p.469, note 1.

最後に、このフィリップの敵であったイングランド王ジョンにも「財産を持っていない者 Sine-habere」というあだ名が付いていた。そのあだ名はイングランド以外の地域でも広く知られていた¹⁴⁴⁾。わが国では長い間「失地王」と訳されていたが、最近では「欠地王」と正しく改められている¹⁴⁵⁾。と言うのも、このあだ名は彼の父ヘンリ 2 世によって、相続財産がなかったことから付けられたもので¹⁴⁶⁾、王位に就いてからの失政の連続によって大陸の領地を悉く失っていったこととは、少なくとも当初は、無関係であったからである。

8. 聖ルイ (9 世) 王 Saint Louis (在位1226-1270年)

父王ルイ 8 世¹⁴⁷⁾の急死によって、息子ルイが王位に就いたのは11歳のときで、母親であったブランシュ・ド・カステューユによる摂政が9年間続いた。しかし、ルイ 9 世は聖地への出発までに、教会と市民を味方につけ、大諸侯連合を戦争と外交で解体させ、イングランド王との衝突も回避し、広く国民の信頼を獲得していた¹⁴⁸⁾。1297年 8 月11日彼はローマ教皇ボニファキウス 8 世によって聖者の列に加えられるが、それはどのような理由によるものであったのか。また、これより前では国王として彼は民衆にはどのように映っていたのであろうか。

これまでの研究によって、ルイ 9 世のキリスト教的王、厳しい王、正義の王、ヨーロッパの調停者としての王といった多面的側面が明らかにされてきた。列聖

144) *Oeuvres de Rigord et de Guillaume le Breton*, t.1, p.87, 126.

145) 今井宏『イギリス』(山川出版社 2000年), 48頁; 城戸毅『マグナ・カルタの世紀』(東京大学出版会 1986年), 23頁参照。

146) *Oeuvres de Rigord et de Guillaume le Breton*, 2, p.175.

147) この王に関しては伝記と事績録が1編ずつ残されているが、そこでルイ 8 世があだ名を付されて登場することはない。Cf. *RHF*, 21, p.302-311,312-344.

148) この王の事績については、cf. G.Sivery, *Saint Louis et son siècle*, Paris, 1983; J.Richard, *Saint Louis, roi d'une France féodale, soutien de la Terre sainte*, Paris, 1983; J.Le Goff, *Saint Louis*, Paris, 1996.そしてここでの叙述では、とくにル・ゴフの著書を参考にした。

前に書かれた年代記で同王は「正義王 Justus」と呼ばれている¹⁴⁹⁾。王ルイが2回目の十字軍に出発する前に没しているエティエンヌ・ド・ブルボンが集めた例話のいくつかでこの王が主人公として登場しているが、「聖王」と呼ばれることはない¹⁵⁰⁾。これに対して、列聖後の1326年にボローニャで作成された別の例話集では聖者として登場している¹⁵¹⁾。同じく、列聖後に書かれたフランス語とラテン語の歴史書でも、列聖後のルイは「聖王」となっているが、それ以前では別の美称辞が用いられている¹⁵²⁾。そして、王の最期に立ち会った、王の聴罪司祭ジョフロワ・ド・ボリュによると、若いときの王は非常に善良で、純潔で、模範的であったとあり、聖性はとくに強調されてはいない¹⁵³⁾。しかし、聖地からの帰還後生き方で最も変わったのが聖性で、王自身やその遺骸に「聖なる sanctus」の形容詞が付され、サン・ドゥニ修道院で起きたことが列記され、最後の章題は「聖人たちのなかに名前が登録されるにふさわしい」お方となっている¹⁵⁴⁾。

ルイ9世は、王としては異例なことに、十字軍に2度（1248-54年と1270年）参加し、1270年、アフリカのチュニス近郊で客死している。存命中にこのあだ名が付されていたことを証明する史料は確認されていないことから、聖王というあだ名は彼の十字軍参加と密接に関係していたことが窺える。実際、王の2回目の十字軍に同行し、遺骸のパリまでの搬送に同行したギヨーム・ド・シャルトル

149) *RHF*, 21, p.215, 217, 218.

150) *Anecdotes historiques. Légendes et apologues tirés du recueil inédit d'Etienne le Bourbon*, ed. A. Lecoy de la Marche, Paris, 1877, p.63, 337, 341, 375, 381, 388, 427, 443. 但し、同王が十字軍に出発するに際しては、「敬虔王 rex pius」の表現が使用されている。Cf. *ibid.*, p.89. 他方、十字軍出発前に書かれたと思われる事績録において、同王が「フランス王国を今日まで見事に統治している」と言うときも、「聖王」の文字は付されていない。Cf. *RHF*, 17, p.433.

151) J. Le Goff, *Saint Louis*, p.374-375.

152) *Continuatio chronici Girardi de Fracheto*, *RHF*, 21, p.5, 16; *Chronique anonyme des rois de France finissant en M.CC.LXXXVI*, *RHF*, 21, p.81-102.

153) Gaufridus de Bello loco, *Vita et sancta conversatio piae memoriae Ludovici quondam regis Francorum*, in *RHF*, 20, p.19.

154) *Ibid.*, p.26.

は1271年とその翌年に起きた十数回の奇蹟について報告している¹⁵⁵⁾。同王の死後、王妃マルグリットの聴罪司祭を務めたギヨーム・ド・サン・パテュスはこの王を「聖なる王」と呼んでいる¹⁵⁶⁾。そして、1272年にローマ教皇に就任したグレゴリウス10世は上記ジョフロワ・ド・ボリュに対して、ルイ王の列聖に必要な情報を速やかに収集するよう命じている¹⁵⁷⁾。

死後に書かれた史料の殆どで、ルイ9世は聖王と呼ばれている。ジョワンビル領主ジャン（通常、「ジョワンヴィル」と呼ばれている）は最初の十字軍にルイ9世に同行し、7年間の東方での生活—約1月の捕虜期間を含む—を共有したが、2回目の十字軍では故郷に残る決断をした。その彼が、ルイ9世の列聖から約7年目に、フィリップ美男王の妃ジャンヌ・ド・ナヴァルの要請を受けて、聖王の事績録『聖王ルイの聖なる言葉と善き行いの書』を著している。これは唯一俗人の目を通してフランス語で書かれた貴重な書であるが、表題に「聖王」の文字が使用され、「今の時代の俗人で、自分に与えられた全生涯を通じて、つまりその治世の開始から生涯の終わりまで、かくも聖人のごとく生きたお方はほかに誰もいなかった」¹⁵⁸⁾と断言している。もちろん、この名声はフランス国内に限ったことではなかった。パルマ出身のフランシスコ会士サリンベネは1248年にルイ9世が十字軍に立つとき、サンスで2度会っている。彼は年代記の中でこの王を、少数の例外を除いて、「聖王」と呼び、次王フィリップによって聖王の遺骸がフランスに持ち帰られたとき、それが故郷の町を通過中に起こした奇蹟を書きとめ、教皇マルティヌス4世の急死を受けて、「恐らく、同王の列聖は別の教皇に委ね

155) Guillelmus Carnotensis, *De vita et actibus inclytæ recordationis regisw Francorum Ludovici et de miraculis*, in *RHF*, 20, p.28-41.

156) Guillaume de Saint-Pathus, *Vie de Saint Louis par le confesseur de la reine Marguerite*, in *RHF*, 20, p.59-121.

157) L. Carolus-Barré, *Le Procès de canonisation de Saint Louis*, Paris, 1994, p.17.

158) Joinville, *Vie de saint Louis*, ed. et trad. J. Monfrin, Paris, 1995, p.4-5.

られることになるであろう」¹⁵⁹⁾と記している。

以上から、「聖王ルイ」の呼び名はルイ9世の死後に、頻発する奇蹟やローマ教皇庁の活発な支援やキリスト教徒の聖地奪還の感情などによって急速に広まっていったと考えられる。

9. フィリップ（3世）剛勇王 Philippe le Hardi（在位1270-1285年）

父王の急死によって25歳で王位についたとき、フィリップの評判は良くなかった。ある事績録ではこのような非常事態に直面して、戦闘経験のない病弱な体質の若い王は統率力の欠如を露呈してしまった¹⁶⁰⁾と記されている。しかし、「剛勇王 Audax, Animosus」とあだ名されている¹⁶¹⁾のは確かである。同じ伝記によると、無学ではあったが、信仰が篤く、聖職者に対しても親切で、有能な側近の意見に耳を傾けた¹⁶²⁾とある。あだ名の由来はフィリップが南フランスの併合やカペ王権が最初に行った征服戦争であるアラゴン十字軍で見せた勇敢な行為によるものであったと考えられる。王族を多数殺害したフォワ伯レモンを討伐すべく軍隊をトゥルーズに進めたとき、後者はフィリップの「剛勇と強さに恐れをなして恥かしげもなく降服した」¹⁶³⁾とある。1285年遠征中の同王はペルピニャンで客死している。

10. フィリップ（4世）美男王 Philippe le Bel（在位1285-1314年）

フィリップ4世の治世は王領地の拡大、行政管区の整備・増加、パリ高等法院

159) *Cronica fratris Salimbene de Adam ordinis Minorum*, ed. O. Holder-Egger, *MGH,SS*, 32, p.295, 300, 305, 375, 434 etc. *Ibid.*, p.596. 《Forte alii summo pontifici ista canonicatio reservatur》

160) *RHF*, 20, p.466.

161) *Ibid.*, p.540; 21, p.405.

162) *RHF*, 20, p.540.

163) *Ibid.*

による国王裁判権の徹底化，三部会による世論の結集，アナーニ事件（1303年）やテンプル騎士団の解散と財産没収（1307-1314年）にみるローマ教皇権の完全排除などによって，フランスが国民国家への道を歩み始めて時期と考えられている。

シャルル6世（在位1380-1422年）の治世に執筆されたと考えられる年代記の中で，1307年の出来事として，テンプル騎士団の解散が教皇クレメンス（5世）の同意をえて，フィリップ美男王（Pulcher, Beau）とイングランドのエドワード（1世）大王の息子エドワード（2世）によって断行された¹⁶⁴⁾とある。この「美男王」というあだ名の由来であるが，ある匿名作家の年代記によると，同王は「当時見つけ出しうる最高の美貌をもつ君主」¹⁶⁵⁾であったとある。他方，サン・ドゥニの修道士イヴが書いて，フィリップ5世に献じられた年代記では「敬虔・美男王」¹⁶⁶⁾と，「敬虔王」のあだ名が加わっているが，その理由は定かでない。

この後，カペ王朝はルイ（10世）強情王，ジャン1世，フィリップ（5世）長身王，シャルル4世によって継承された¹⁶⁷⁾あと，1328年から王権はヴァロワ王朝のフィリップ6世に移ることになる。

最後に，ローマ教皇の場合，旧名で呼ばれることがあった。聖レオ9世（1049-54年）はブルノと呼ばれていた¹⁶⁸⁾，彼の友人で，後の教皇グレゴリウス7世もヒルデブランドと言われていた¹⁶⁹⁾とある。

164) *RHF*, 21, p.142-4.

165) *RHF*, 21, p.132.

166) *Chronicon Guillelmi Scoti*, in *RHF*, 21, p.202. 写字生 Guillelmus Scotus が誤って著者とされてきた。Cf. A. Molinier, *Les sources de l'histoire de France*, 3, p.190.

167) *Continuatio chronici Girardi de Fracheto*, in *RHF*, 21, p.26, 28, 47, 58, 59.

168) *AASS*, Sept 2, p.618.

169) *Vita s. Simonis*, *AASS*, Sept 8, p.745.